

〔翻 訳〕

ロマン・インガルデン著

『文芸作品論——存在論, 言語論, 文学の哲学, ——』
その境界領域の研究

(1960 年, ポーランド語版) (4)

武井 勇四郎 / 西澤 孝 訳

凡 例

訳者前書き (2003)	武井 勇四郎	3
日本語版に寄せて (1981)	国際現象学会会長 A.-I. テイミュエニエツカ	14
ポーランド語版序文 (1958)	ロマン・インガルデン	18
ドイツ語第一版序文 (1931)		26
〔ドイツ語第二版序文〕 (1959)		31
〔ドイツ語第三版序文〕 (1965)		33

(以上 37 卷 3 号)

第一部 予備的問題		43
第一節 序 説		43
第一章 先立つ問題		47
第二節 〔作品の〕事例範囲を暫定的に絞る		47
第三節 文学作品の存在様式の問題		51
第四節 文学作品の心理学主義的把握と作品の同一性の問題		55
第五節 「表象の対象」としての文学作品		63
第二章 文学作品に属さぬ構成要素を考察から除外する		70
第六節 テーマをさらに絞る		70
第七節 何が文学作品に属さないか		72

(以上 38 卷 2 号)

第二部 文学作品の築層構造		82
第三章 文学作品の基本的構造		82
第八節 多層的形成体としての文学作品		82
第四章 音声形成体の層		89
第九節 単語と語音		89

第十節	いろいろなタイプの語音とその機能	103
第十一節	高次の音声形成体とその特性	109
第十二節	文学作品に属する音声形成体の範囲	121
第十三節	文学作品の築層構造における音声層の役割	123
	(以上 39 卷 1 号)	
第五章	意味形成体の層	134
第十四節	始めるにあたって	134
第十五節	語義の構成要素	135
	(以上本号)	

凡 例

- 1) 本の書名は『』で、論文名は「」で示した。
- 2) ポーランド語版の脚註は番号を()で括って(原 1)のように、訳者の註は番号を〔〕で括って〔訳 2〕のように示し、各節の終わりに両者をまとめて通し番号にした。
ポーランド語版(1960)の脚註の最後に[1958]とあるのは、著者がポーランド語版に付け加えた新脚註である。しかし、[1958]で示されたもの以外にも、ドイツ語第一版の脚註になく、ポーランド語版にある脚註には[1958]で示した。
- 3) ドイツ語第一版から大きく増補されているか、大きく改変されている箇所は【】で括った。脚註でも。
- 4) 隔字体には下線をほどこし、イタリック体は例えば「疑似判断」のように斜体太文字にした。人名は、初出の場合に限り原名を記載した。
- 5) 訳文中、〔〕文は訳者の挿入したものである。
原文の „“ は文章も単語も「」で示し、欧文中ではそのままにした。
- 6) 写真を適所に配するが、提供の複製には〈写真 1/複〉のように、訳者武井が撮影したものには〈写真 2/武〉のように明示し、必要に応じて節註末尾に説明文を付した。
- 7) 当邦訳の文章および掲載写真の全部または一部を訳者に無断で複写複製または転載することは堅く禁じます。



〈写真1/複〉 中世 CRAKOVIA の古図 (エッチング)。向かって左にワーヴェル城大聖堂の鐘塔が高々と天を衝き、右に聖マリア教会の尖塔の旗が風になびく。旧市街地区とワーヴェル城が、高い城壁に囲まれている。当時の最大の敵は外敵であり、蒙古の騎馬民族タタールであった。城下のヴィスワ河に船が往来している。

第五章 意味形成体の層

第十四節 始めるにあたって

さて各種の形成体のもつもろもろの機能の研究に着手しよう。これらすべてが一緒になれば、文学作品の第二の層、つまり、意味形成体ないしは意味単位の層となる。特にこの層のすべての要素を細かく規定しておく。それらを知っておけば、この層が文学作品においていかなる役割を果たすか理解できよう。しかし、それと同時に、語義や高次の意味形成体の一般的本質を解明する必要がある。そして意味形成体は、フッサールが『論理学序説』のある箇所では主張したように、本質的に理念的なものなのか——せめてこの問題に答えが出せる程度に解明しておく必要がある。ここで意味形成体の周到な理論を検証することは、もちろんできない。答えを出さずに問題をたくさん提起し、その概略にとどめざるをえなかったことは、ことわるまでもない。そうでなかったら、文学理論にとって必要な限度を大幅にはみだ



〈写真 2/武〉〔註〕

TARGI SZTUKI LUDOWEJ KRAKÓW (クラクフ、民芸品祭 1977年9月3-4日) のアトラクション(1)——ヴィスビアンスキの『結婚式』(1977年撮影)。

す始末になろう。

第十五節 語義の構成要素

〔この節は大幅に改訂・増補されている。【】で表示する。〕

当面は語義の本質を一般的に扱わずに、語義に出てくるいろいろな要素を区別し、それらの相互関係を規定したい。

ところで、どんな語義も同じ様にはできていない。例えば、「机」「赤さ」「黒い」というような語が一方にあれば、他方には以前「共起語」と名づけたが、ほとんど詳しく研究されたことのない語や小詞がある。しかし、これは最近の論理学の文献において、特にフッサール以降^(原1)ますます重要な意味をもつことになった。A. Pfender プフェンダーはこれを「機能概念」^(原2)と名づけた。例えば、「i」[and]、「lub」[or]、「jest」[is]等の語がこれである。一番目のグループの語は意味を持つが、その構造は二番目のグループの語義と全く異なる。うまい用語が見当たらないので一番目のグループに属する語を「辞」^(原3)〔「詞」の方は文法的表現であり、例えば、名詞「花」、形容詞「美しい」、機能小詞「そして」とかの「詞」に用いられる。対して、「辞」の方は、「開会の辞」「辞表の提出」に見られるように、有意味の語句の集まりである。〕と名づけ、そしてその語の意味を「名辞の意味」と名づけておく。まずこれから扱おう。あとで三番目のグループ、つまり、定動詞のグループも区別して

おこう。

1. 名辞の意味

語音と結合し、それとともに「語」を作るものすべてに、一応、「意味」(原4)と名づけておく。すると、当面、文の文節とはならぬ孤立語を考察する以上、名辞の意味には、次のさまざまな構成要素が区別できる。

- 1) 方向指示因
- 2) 質料的内容
- 3) 形相的内容
- 4) 存在性格づけの契機と、時によって
- 5) 存在位置の契機

むしろ、名辞の意味は、このような要素のばらばらな寄せ集まりと見るべきではない。逆に名辞の意味は堅いまとまりをなして、指摘した諸要素はそのなかでしか区別できない。わけても名辞の全意味の内実は、いま区別した構成要素が緊密に結び合っているにとどまらず、幾重にも依存し合っていることが特徴となる。なお、この問題に立ち戻る機会があろう。

名辞が高次の意味単位の分節として、特に文の分節として出てくるなら、その意味には、さらに各種の構成要素が存在しよう。しかし、これは後廻しにする。

1) の説明

例えば、a)「地球の中心」。b)「机」(ドイツ語の「ein Tisch」という意味の「ある机」という種類の表現を事例にして考察しよう。するといずれもある対象と関係しており、ある対象を指示し、ある対象に向かっているのに気づく。そうなるわけは、そのいずれの名辞を用いても、どういう対象であり、どういう性質の対象であるかを(まさに「机」であり、「地球の中心」であることを)、こうもいってよければ、決定している要素が、その意味のなかに含まれていることによる。対象の質的性質を規定する語義のこの契機を、語義の質料的内容と名づけ、それに対してその語がほかでもないこの対象と、あるいは——別の場合だと——この種の対象と関係する契機を方向指示因と名づけよう(原5)。

名辞の方向指示因にいろいろな種類があることに直ちに気づく。取り上げた二つの事例のような場合だと単放射であるが、多放射もある。しかも、特定と不特定の

ものがある。「人々」の語が不特定の多放射であるのに対して、「私の三人の息子」という表現では特定の多放射である。同様に若干の言語に残っている *dualis* (両数形)^(原6) もそうである。名辞の方向指示因は観点をやってみると、定数的で顕在的なものもあれば、変数的で潜在的なものもある。前者は「地球の中心」とか「1939年のポーランドの首都」とかの表現の場合である。また、一般的理念(「das Dreieck」)の意味での「三角形」の語もそうで、数的に完全に規定された実在の対象ないし理念的対象(もしくは理念)を指す。これに対して「机」の語を「ある机」(「ein Tisch」)の意味にとるとその方向指示因は、潜在的で変数的である。潜在的にすぎないものが顕在化される一番よい例は、「机」の語をある個物に用いるとか(例えば、私の食堂の食卓)、「これは何ですか」の質問に「机」ですと答えるときである。(ここで言いたいのは、「机」という集合の一要素としての「一つの机」でなく、むしろ今ここにある個物をその個性性において捉え、その性質を取り出してこの名辞でそれぞれを名指す場合である)。しかし、「机」の語は同じ風この種のいろいろなたくさんの対象に、つぎつぎに適用される。この点に、まさしくこの語の方向指示因の变化性が現れている^(原7)。もちろん、「机」の名辞が数的に一義的に特定された対象に用いられない限り、その方向指示因は潜在的で変数的である。適用されると顕在的で確定的なものとなる。しかし、何にも適用されない限り、「机」の名辞は「いずれかの机」という意味で一般的名辞であり、この名辞の意味によって、確定された集合に属するいずれの個体をも指す。それに対して、名辞がその意味によって顕在的で定数的な方向指示因を出すと、例えば、「地球の中心」、「地上の最高峰」――

は個別名辞となる【(この場合では「単数」となるが、それに対して「ヤギェウォ王女の五人の息子」の場合だと単一の複数名辞となる)】。

方向指示因は個々の名辞の意味(単純名辞や複合名辞)にも、例えば、名詞にも形容詞にも出てくる。そ

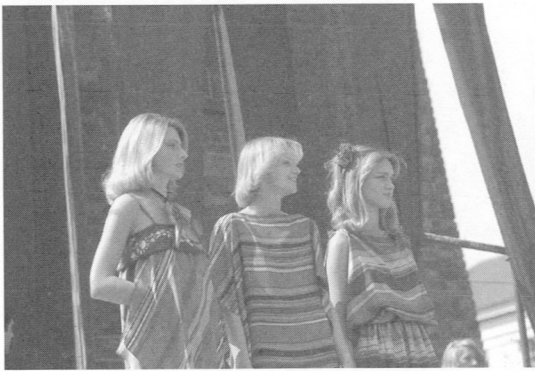


〈写真3,4/武〉民芸品祭のアトラクション(2)、(上)クラクフの民俗ダンス、(右)中央広場を埋め尽くす観衆(1977年撮影)。

れに反して、例えば、「i」[そして]とか、「albo」[あるいは]のようなほとんどすべての機能小詞にはこれが欠けている。それに対して「これ」「あれ」等の指示代名詞なら、純粹な形で出てくる。その種類——例えば、定数的であるか変数的であるか等——は名辞の意味の質料的内容に依存している。方向指示因が意味そのものに基づいて定数的で顕在的である場合は、質料的内容が意味の指向対象を個体として完全に一義的に規定する特性（一般にある対象に帰属するとして）によって規定する場合は、名辞の意味（「ある机」という意味での「机」）の質料的内容がその対象のある契機（「机性」）でもって規定する場合である。この契機は対象を構成する個的本性に属しているが、その本性を汲み尽くさず、それだけではそれを構成もできない(原⁸)。同様に、質料的内容が名辞の意味の対象を一つか、もっと多くのいわゆる「共通属性」でもって規定する場合にもいえる。この共通属性はたいへん抽象的なもので対象をその個別性に関して規定できない（例えば、「森の山」）。この場合の質料的内容は方向指示因の顕在性と定数性を、こうもいってよければ、強要できない。当の語を文脈のなかでこれと決まったケースに当てはめて初めてその方向指示因が出てくる。この種の変化が語義の全容のなかで起り、またしきりに起こることも事実である。これは意味統一の存在様式の問題にとって大きな意義をもつ。後ほど、さらに別のこの種の意味変化を示そう。】変数的で潜在的な方向指示因の名辞を一般の名辞と名づけるなら、方向指示因の変化の限界は、まさに「概念の外延」と呼び慣らされた当のものであり、またこの「概念」のなかに入る対象の総数と、全く誤って同一視されたものである。



【名辞の意味の方向指示因と質料的内容の結合によって明らかにされるように、名辞の意味が志向的要素のばらばらの寄せ集まりではなく、一つのまとまりをなして、われわれが特徴づけた要素は抽象の方法に



〈写真5,6/武〉民芸品祭のアトラクション(3)
ファッション・ショー (1977年撮影)



よってしか区別されないのである。このことはフッサールが「ein A」という表現を分析したさいに、はっきり述べた所説である。つまり『論理学研究』第1巻147頁にこうある。「Aという文字がこの種の結合のなかで象徴しているのは、共義的と見なされなければなるまい。ライオン、あるライオン、このライオン、すべてのライオンなどの表現は確実に、かつ明証的に、ある意味要素を共有していて、それは孤立化できない。」「ドイツ語原文省略。名辞の意味の「質料的内容」というときは、まさにこのような名辞の意味の「共通要素」の一つを、われわれは念頭におくのである。次にこのことをもっと詳しく論じることにして。」

2) の説明

質料的内容は対象の質的性質を規定するところからそう名づけたが、【それはまず名辞の特徴であってA. プフェンダーの言う「純粹機能」小詞の意味には現れない(原9)。】その働きは名辞が指す当のものを規定することにある。これがこの機能を果たせるわけは、それが本質的に思考的思念(原10)であることによる。ところで、志向的对象的思念(ないしは思念作用)の本質としては、思念することによって思念そのものとは何か別のもの、つまり「志向的対象」そのものがいわば「樹立される」こと、比喩的な意味で「創造される」ことが挙げられる。志向的対象についてはこの先でもっと詳しく述べることになる。ともあれ、名辞の意味の質料的内容

の機能はこの対象をその質的性質の点で「規定する」ことにある(原¹¹)。質料的内容は、ある意味で志向的对象に特定の「質料的」(「質的」)属性を帰属させるか、もっと正しくいえば、「あてがい」、その対象をその属性で捉え、名辞の意味の形相的内容とあいまってそれを一つのまとまった存在として「創造する」。こうした質料的内容には一種の *sic iubeo* の契機、つまり「かくかくであれ」(例えば、なめらかな木の机であれ) というような指示的契機が、入っているといてよからう。ある名辞の意味の純粋志向的对象がどのような質的規定をもつかは、もっぱらこの名辞の意味の質料的内容にかかっている(原¹²)。あるいは同じことを、視点を変えていうなら、ある名辞の意味に本質的に属する純粋志向的对象は、その質料的性質に関して、名辞の意味の質料的内容においてその対象に帰属されたか、付与されたか、あてがわれたかの、ただそれだけの契機しか持ち合わせていない。名辞の方向指示因——この名辞をそれ自体として見るならば、つまりこの名辞とかかわりなく *idealiter* [理念的] ないしは *realiter* [實在的] に存在するものに、それをいろいろと適用し関係づけてみる以前にそれ自体としてみるならば——は、名辞の意味の質料的内容および形相的内容によって、その内実が創られる志向的对象をまさに指示しているし、指示する方向に関してもこの質料的内容および形相的内容にまったく依存している。

なお、次の点も指摘しておこう。名辞の意味の質料的内容は志向的对象を、もっぱら下位のこれ以上種別化できない契機でもって規定する必要は、何もない。逆にこうした志向的契機のほかに質料的内容が、対象に高次の類的契機を備えさせる契機を含むことはまったく可能であり、またかなりひんばんに起る。また質料的内容に最下位の種別の契機が一つとして現れず、高次の類的契機ばかり出てくるケースはいくらでもある。例えば、「有色物」という表現に注目しよう。その質料的内容が志向的对象を規定していても、それが物であって色がついているだけのことにすぎない。この物がどんな色をしているのか、どんなニュアンスの色なのか、この名辞の意味では皆目見当がつかない。しかし、これが、かならず、何かの色を、何か最下位の色のニュアンスを有すべきことは、この名辞の意味が語っている。ともかくそのものは色がついているはずである。これは一つの最下位の色ニュアンスがそのものに具体化されるときにのみ可能である。かくしてこの表現の、意味の質料的内容には、一つはその志向的对象を一般に「有色である」と規定する契機が、もう一つはそれが最下位の「いずれかの」特定の色ニュアンスを有するものと規定する

契機が出てくることになる。こうして質料的内容の対立的契機は本質的に区別される。前者〔有色物〕が一義的に確定された「定数」でもって名辞の対象を規定するのに対して、後者〔色ニュアンス〕はある特殊な無規定性の契機を対象に与えることになる。この無規定性にはその限界があつて、当の定数的契機（と同時に上位の）となる質料的内容の契機（「有色」）によって決められている。この無規定性が消えて規定性へ一変するのは、その無規定性の枠内に含まれる一義的に確定された最下位の質的契機によるしかない（したがって例えば、「咲き始めのけしのような赤色」）。「有色」の語句のように、一義的に決まった最上位の質的契機を規定する質料的内容の要素を、名辞の質料的内容の「定数」と名づけよう。それに対して二番目の対立するタイプに属するその要素の質料的内容を「変数」と名づけよう。それをそんな風に名づけるわけは、この変数が名辞の志向的对象に無規定性の契機を設けることにとどまらず、志向的对象を一義的に確定しようとするさいに、その無規定性を取り除く個々の質的契機が、いろいろと変化しうることを示したいからである。この場合、質料的内容の「変数」はかならずしも最下位の質的種別でなくともよく、「定数」によって規定されているよりも下位の種別でもかまわない。

【どの名辞の意味にも「定数」と並んで「変数」もかならず現れるのか、また変数の表れ方は定数のそれと同じであるのか——これは問題であるが、いろいろな表現の意味を特別に考察して、詳しく扱う必要がある。ここで解決するつもりはない。問題がどう提示されようと、名辞の質料的内容に変数が、出てくること自体が重要である。なぜならば、その存在を考慮すると、重要な論理学上の問題が解けるからである。例えば、よく口にされるいろいろな「概念」を、その普遍性の程度に応じて秩序づける問題が解決される。この「変数」を考慮しなかったがために、なにかなく、「概念の内包」といわれることの誤った理解の仕方が生まれたのである。つまり、名辞の意味における質料的内容のうちの「定数」の集まりだけが注目され、そのことで概念の内包が全部かたづけと見なされた。このような問題の扱い方が、論理学と存在論に根本的な誤りを、いろいろと持ち込むことになった。このほかに「概念の内包」は、当の概念の下に入る対象の「共通属性」の総数として、まったく無意味に定義された。質料的内容に変数が現れることは、これ以外にわれわれの文学理論の枠内でも特に重要な意義をもつ。というのはこの先で示されるように、それは文学作品の描かれた対象の構造に影響を及ぼすからである。つまり描かれた対象の内実には「無規定箇所〔Unbestimmtheitsstellen〕」が現れるのはこのためで

ある。ただし、その源泉はまた別のところにあることも多い(参照、第三十八節)。

最後に強調しておくが、名辞の方向指示因の可変性は、その質料的内容の「変数」の出現と密接に結びついている。方向指示因がかならず変る場合がある。それは志向的対象の個的構成本性を規定する、ある「変数」が、この質料的内容に出てくる場合である。それもこの質料的内容にその個性を「強要する」属性が顕在的に与えられていないときである。例えば、「動物」という名辞の質料的内容には、「動物性」という構成本性の契機によって構成される。対象がいかなるものであるかを決定する要素が出てくる。ところで、この構成要素の契機は、それとしてはその「動物」がどんな種類の動物であるべきかを前もって決めているわけではなく、こうもいってよければ、動物の種類は決めず、むしろ「動物」という類のなかでなら全く任意の、どの種でもかまわない。ここに質料的内容の「変数」契機が含まれ、それは対象の構成本性の特殊契機を決める「定数」契機にくっついている。そしてこの「定数」契機はそれとしてはいかなる個別的動物も構成できない。したがって、前に指摘しておいたように二重に非独立的な契機となっている。われわれはこの質料的内容の定数契機によってある対象を規定はするものの、いわば簡略な「図式」によって規定するにすぎず、個的な構成本性によって規定し尽くすわけではない。と同時に「動物」という名辞の質料的内



〈写真7,8/武〉

(上)金髪をカラフルな造花で飾った愛くるしい幼女、(下)クラクフの民俗衣装で着飾った幼女(1977年撮影)。



容に、この対象を個別化する属性となる要素が現れてないために、その方向指示因が潜在的で変数的である「一般的」名辞を扱う結果となる。同じことは例えば、「アジアの峰」という名辞の場合にもいえる。しかし、この名辞に「最高の」を付け加えて「アジアの最高峰」の複合名辞をつくると、一般名辞から、その対象が特定の（この場合は一つの）個体となる単一の個別的名辞を手にするようになる。しかし、こうなるのはこの対象の構成本性の契機を補う要素が名辞の質料内容に出現するからではなく、むしろある対象を個別化する属性をその対象に帰属させることによる。この結果、名辞は単一となり顕在的な固定した方向指示因をもつことになる。それに反して、こうした名辞の質料的内容にもつばら定数しか現れないのか——これは問題となるが、ここでは解決しないでおこう。

一般的名辞と個別的名辞の区別と関連して固有名の本質的な役割も説明がつく。それは特定の個体を指すのに役立つ（A. ミツキューヴィッチ、L. v. ベートーベン、ギェヴォント山〔ポーランドとスロバキアとの国境沿いにあるタトラ山系の標高 1909 m の山〕等）。固有名が「授けられる」のは、特に命名式や「洗礼」によるか、当の対象をそう名づけるだけで結構だ、という偶然的な思いつきや慣行によるかである。「名づけられる」対象はこの場合、名辞とかかわりのないある実在の対象である。したがって、「純粋志向的」対象ではない。それに固有名の意味もしくは質料的内容を、理解する二つの異なった解釈が浮ぶ。この解釈はおそらく二つとも正しく、ただある個体を指す固有名の二つの異なった使用段階に関係しているにすぎない。一番目の解釈によればある個体（人間、動物、山岳）に「名前」を「つける」のは、この個体に個別化となる目立った徴表を対応させるのが目的である。当の対象を構成する個的本性の特殊契機がどうもうまく見つけだせず、それを一義的に規定するために、個別化となる徴表をそれに持たざるをえないのでそうするわけである。つまり、この徴表がまさにこの名前となる。個体に一対一対応でつけられた固有名は、その代理者の如きものである（神や聖人の名前の「神聖さ」はここからくる）。個体そのものを人格化する。その場合、もちろん、固有名となる徴表を対象に対応させることで、その対象を規定するほかに、何か特殊な質料的内容が含まれていそうなことは言うまでもない。固有名の方向指示因は定数的で顕在的である。なぜならば、(1) この対象の構成本性に関係する変数がない。それはこの名前となる徴表を指示する契機以外には、およそ質料的内容がないからである。(2) まさにこの徴表が、固有名の対象を個別化している徴表であるからである。二番目の

解釈によれば、固有名をある個体につけるさい、努めて全く独自の語音を選んで、その語音を名前のように、対象のこれまた独自なものに、つまり固体を構成する個的本性に対応づける。われわれは名前をつける時点で、この本性が見つけだせなくても、それぞれの個体(人間、動物、例えば、葦毛の馬)や自然(山岳、河川、国の地域)にその本性が現れるものと確信している。またこの本性こそが、この個体の単一性と非反復性を決定するものと確信している。その語音の固有名は、個体を構成する個的本性のこの独自性をある程度まで示す。というのは、その特殊な非反復的な本性の *sub specie* (相の下で)、捉えられる対象の名辞となるからである(原¹³)。この結果、固有名は定数的で顕在的な方向指示因をもつ。というのは、その質料的内容に対象の個的本性を規定し尽くす定数的契機が現れるのに対して、その本性に関する変数が欠けているからである。この本性の契機に特別に選ばれた語音と名辞であると、固有名は当の対象に対して、ある程度重要な役割をはたし、そのため例えば、聖人の名前とか高尚な人物の名前だと「神聖さ」とか「高尚さ」とかの性格をおびる場合がある。われわれがこの名前を使ってこの人に関する豊かな経験を日々つんでゆくなら、やがてこの人を構成する個的本性の質的特性(特に人物における「ミツキューヴィッチ的なもの」とか「ゲーテ的なもの」とか「ファウスト的なもの」とか)が分かり始める。このことと関連して当の固有名の質料的内容も、もはやその本性の契機をただ指すだけではなく、ある程度その質的特性によって満たされる。すると「アダム・ミツキューヴィッチ」という名前の内容はわれわれにとって、その名前のついている人の「人柄」、性格の、またすぐれた総合として直観できるものか非反復的な特殊な固有名によってしか名づけようのない、またとない最終的な総合となる。

〈写真9/武〉 模型コンテスト——聖マリア教会の左塔を背景に、織物ホルの巨大な模型を潜る観客。この模型の見どころは、織物ホルの屋上にある一連のベルソナの顔つき(ユダヤ商人)を拡大描写した点(1977年撮影)。





〈写真 10, 11/武〉 フローレンス門の内側の壁は当時の面影を遺す。周辺一帯はその壁面を利用した展示・即売で賑やかな青空市場になる (1977 年撮影)。(右)そこで求めたイエス・キリストの木彫 (7×45 cm)。



以上の、単一的なもの、非反復的なもの、よって「個別的なもの」を規定する固有名とその役割についての指摘は、作中に描かれた対象の層を考察する時には、大きな意義をもってこよう。そのとき、問題が起こる——ある厳密な個体を作中に「描き出すこと」がいかにして可能なのか。というのも、やがて見るように、文学作品にはこの可能性と真向から対立する要素が沢山あるからである。

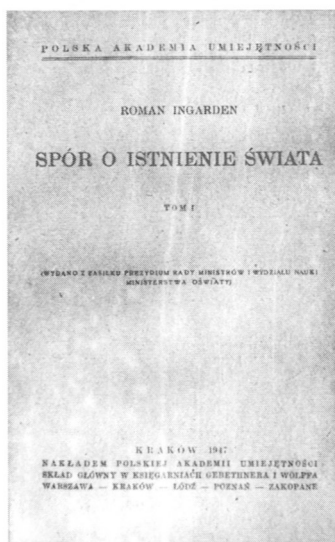
名辞の質料的内容の話題に戻ろう。一般的名辞か個別的名辞かは別として、さらに指摘しておくが、名辞の質料的内容は普通その志向の対象を不完全にしか規定できないのである。なぜならば名辞の質料的内容はその対象がいわば *de iure* (権利上) もっていなければならないたくさんの属性を規定していないし、それについて肯定的にも否定的にもあらかじめ少しも決めていないからである。これがどの程度のものなのか、名辞の意味の不変なものなのか、名辞の用い方とそれが出てくる文脈次第で振幅するものなのか——こういったことは語の顕在的意味と潜在的意味と

の区別を論じる段になったら述べることにしよう。当面、名辞の質料的内容にこの「不完全性 niekompletność」のあることに注意を促し、この不完全性が、既に述べた現象の「変数」と同一視されるべきではないことを表明しておくだけにとどめる。】

3) の説明

ところで、もし名辞の意味のなかに質料的内容と方向指示因のほかには何もないとしたら、この意味はいかなる対象も、特に「個物」のタイプの対象を樹立したり規定したりはできないであろう。というのは、現実の対象にしろ、理念の対象にしろ、純粋志向の対象にしろ、そのどの本質にも、対象を質化するか対象に帰属するかする特定の多種多様な質的契機が属するだけでなく、特徴的な形相的構造^(原14)も属するからである。この構造は、問題となるものが存在独立的対象(特にいわゆる「実体」)か、わけてもいわゆる「物」か、例えば、あるものの性質か、あるもののおかれている状態かに応じてそれぞれ異なる。ここにあげた対象タイプは、あれこれの形相構造をもったものとして、名辞の意味によって事実上規定される。よって名辞の意味の総体には「質料的内容」とならんで「形相的内容」も現れるものと認めざるをえない。じらい、この契機はほとんど注目されず、名辞の意味がその質料的内容だけに限定されてきたとするなら、その原因は形相的内容の名辞の意味における現れ方が特殊であることによる。この点でそれは質料的内容から根本的に異なっている。例えば、複合名辞「(ある)等辺三角形」を見てみると、その質料的内容には一つの意味単位となる相互に関連しあういくつかの契機が含まれている。この語義に属する対象の特徴を規定している個々の契機を単独の語義要素として個々ばらばらに探だせる。一般的に言って、これは語義の形相的内容に関しては、少なくとも正常な使い方では正しくない。対象(例えば、三角形、机、走行等)の形相的構造は名辞においてその質料的规定のように概して明示的に思考されない。とはいえ、形相構造の契機も名辞の意味においてともに思考される。つまり、機能的に思念される。名辞の意味はその質料的内容によって質的に規定された対象——もつともこのことだけでは「対象」とはならないが——に対して、それをいろいろと形相化する機能を果たしているといつてよい。【この機能は、質料的内容によって規定されたものを形相的構造単位として、例えば「物」として、「状態」等として扱うことにある。「あるもの」を属性の主体とか、あるものの性質とか、

あるものの状態とか、として「扱うこと」自体が、通常、名辞の意味の「形相的内容」をなすのである(原¹⁵)。通常、機能的な仕方ではしか現れないこの形相的内容を、こうもいってよければ、明示化できないことはない。しかも、対象の形相的構造の当の特徴を、対象の質料的(質的)構造と同じ具合に明示的に考えることができる。例えば、複合名辞の意味——「机なるものを規定する赤さ *czerwień określająca rzecz będącą stołem*」がこれである(簡単に「机の赤さ *czerwień stołu*」と言う代わりにそう表現しておく)。ここでは、机を規定するか机に赤色を帰属させる機能と机の形相的構造はこの表現の形相的内容によって機能的にしか規定されていない。この形相的内容とは、a)「机」の語の名詞形、b)この語の第二格〔*stołu*は*stół*の2格〕の文法的機能、最後にc)「赤さ」の語の名詞形にある。このように形相的内容を「明示化」にしてみることによって形相的特徴の一定の集まりが当の志向の対象に浮き上がってくる。でもこの特徴は「机の赤さ」の表現の対象の方に目が奪われると、概して目につかなくなる。「形相的内容」が名辞の意味のなかに明示化されることは——形相的内容はこのことによってある程度いわば「質料的内容」となる——むしろ例外と言ってよい。しかし、他面このように「明示化」できるのは、形相的内容が名辞の意味のなかに現に含まれていることの良き証である。】



〈写真 12, 13/武〉

ヤギェウオ大学大図書館。ここで、帰国間際まで本屋で入手できなかった『世界の存在をめぐる論争』第1巻、2巻(1947-48)および『フッサール現象学入門』(1974)のポーランド語版哲学選集のマイクロフィルムを作成して頂いた(1977年撮影)。



4)と5)の説明

最後に、名辞の意味のなかにはかならず存在を性格づける契機が、普通、機能的な形で(原¹⁶)時には明示的に現れる。例えば、「現在のポーランドの首都」という名辞では、ワルシャワが「首都」として考えられるにとどまらず、存在様式の点からみても実在するものとして考えられる。ただしこの契機が「機能的な」形でしか現れない点からして、このことは「はっきりうたわれて」(原¹⁷)はいない。同様なことは「等辺三角形」という名辞の対象が理念的存在として捉えられる場合にもいえる。しかし、この存在を「性格づける」契機と「存在を位置づける」契機とを区別しなければなるまい。前者ではあるものが一般に存在している限り、それがどのように存在しているかだけが問題となる。それに対して後者ではそのものが事実上(あちこちに)存在することが問題となる。普通、この二つの契機は一つの名辞のなかに一緒に現れる。その場合、存在位置の契機にはさらにいろいろな種類があって、存在性格の契機と一致するときもあれば、一致しないときもある。最後に、しばしば存在位置に代って、存在否定(原¹⁸)の契機が現れる。以上のことは文芸作品の分析に当って多大の役割を果たす。特に文芸作品に、例えば、学術作品を対置させた場合、そうなる。これを詳しく説明するには微に入り細にわたった考察が必要となる(参照、第二十五節)。当面、いっておくだけにとどめるが、かなり横行している意見と違って、存在位置の契機は判断だけでなく、すでに名辞のなかに現れているし、また存在性格の契機と違うものである(原¹⁹)。例えば、「ポーランドの首都」という名辞ではこの首都は実在的なものとして特徴づけられるだけでなく、実在的なものとして本当に存在するものとして性格づけられる。それに反して人がアトランティス大陸を話題にするなら、今の知識の有様ではこの名辞の意味のなかには、(それを「実在的なもの」として規定する)存在性格の契機はあってもアトランティス大陸が本当にどこに存在したかについては定かでないので、この名辞には存在位置の契機が欠けているのである。一見したところ、「ハムレット」(シェイクスピアの戯曲の有名な人物)という名辞の場合にも、同じことが表象されるかもしれない。この名辞は、実的に決して存在したこともないし今も存在することもない対象を規定しているが、しかし、この戯曲のテキストの意図からすればこの対象は、いつか存在したのなら「現実性」(realitas)という存在様式をもつ対象に属することになろう。したがって、この名辞には存在性格の契機が含まれるのに対して、存在位置の方は欠いているように見える。しかし、シェイクスピアのこの傑作

のテキストに読み耽ると、その表現力と、ハムレット像を具体化する描写力に圧倒されて、この名辞が存在性格の契機のほかに全く特殊な存在位置の契機をもつように思えてくる。なるほど、ハムレットは、現実的に存在する時空の実在世界に位置づけられはしないが、シェイクスピア戯曲の意味内実と実現手段によって樹立された、こうもいってよければ、「虚構的」現実のなかに位置づけられる。ここで特に分析しにくい事態に直面することになる。この事態が文芸作品にとって根本的な意義をもつので、この先で仔細に扱うことにしよう。

私が区別した以上の名辞の意味の契機や契機群は緊密に結合し合い、機能的にいろいろと依存し合っている。例えば、名辞の意味の質料的内容によって形相的内容の相違も一義的に決まってくる、等々。ここには特定のアプリオリな法則性が存在しているからである。ここで詳しく扱うことはできない。まさにこの法則性が、すでに述べたように名辞の意味として、存在独立的な無関係の語要素のばらばらの寄せ集まりたらしめず、むしろまとまった全体に仕立てているのである。ここで個々の要素や契機が抽象の上で識別されはしても、それを他の要素から分かつことはとてもできない。この問題をこれ以上詳しく研究すると意味形成体の一般理論に深入りしすぎることになる。

やがて明らかにされるように、名辞の意味に含まれるいろいろな要素や契機を区別しただけでは、まだ意味を名辞の意味として性格づけるには不十分である。しかし、こうした区別は、名辞を他の意味形成体に対置させ、その意味の性格づけの準備にとって、どうしても必要であった。

II. 名辞と機能小詞の相違

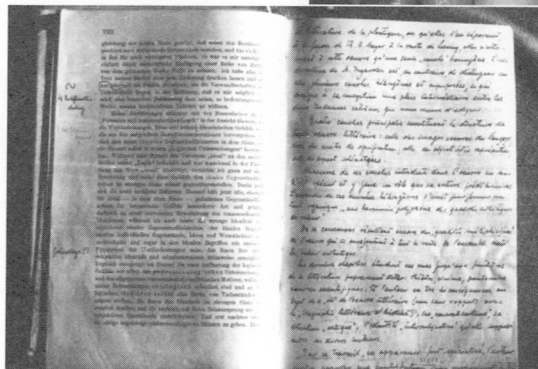
名辞的語義の本質を明らかにするために、さしあたりそれをいわゆる「機能する小詞」、もっと簡略にし名辞の意味の本質を明らかにするために、さしあたりそれをいわゆる「機能する小詞」、もっと簡略にして機能小詞と対照してみよう(原20)。

一見したところでは、両種の語に区別を設けることはとても簡単のように見える。第一に名辞的表現の意味には方向指示因と質料的内容があり。機能小詞の方にはそれらが無い。第二に機能小詞はいろいろな機能をはたすのに対して、名辞的表現はいかなる機能もはたさない。

ところが問題はことほど左様に簡単ではない。第一に純粋な機能小詞のなかにも、まず方向指示因をもつことでその機能が成り立っているような語がある。それ

〔写真 14/武〕〔註〕

クラフ科学アカデミー図書館
インガルデン文庫のN. ハルトマ
ンの著作。



〔写真 15/武〕

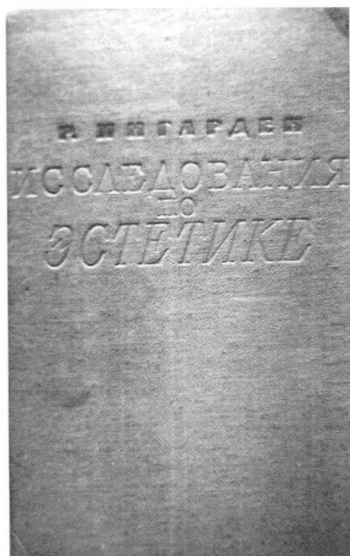
ドイツ語第一版ゲラ本へのイン
ガルデン自身の書き込みメモ。

は、A. プフェンダーが『論理学』(参照, 303頁)で区分したそれであって、「この」「あの」「ここ」等の多様な形で現われる「指示的」機能小詞である。それらには一定の方向指示因があると思われる。もっとうまくいうなら、その意味だけで、もうかような方向指示因となっている。それが変数的であるか、定数的であるか、どの方向を指しているか——こういったことはすべて、当の小詞が他のどんな名辞の意味と結びつくかに全面的に依存している(原²¹)。他方、機能小詞に質料的内容、少なくともそれと類似したものは何もないというのは正しくない。どの機能小詞も対象間に一定の「事象的」連関(関係)を定めるとプフェンダーがいみじくも述べているように、質料的内容をもつ。【例えば、小語「obok〔ポーランド語では前置詞で「横に」の意味〕」だと、その意味はそれとしては、対象のいかなる質的性質も規定していないし、またいかなる対象も一般に「樹立」していないのでそれに属性を帰属させようがない。「stolek obok stol〔机の横の椅子〕」だと二つの名辞が二つの対象を樹立し、小語「obok」が前後の対象を空間的配置で特徴づける。まさにこの空間的配置の特徴づけは名辞の質料的内容と似たものとなる。】最後に名辞の意

味がその対象に対して何一つ機能をはたさないというのも正しくない。ある程度名辞の形相的内容を形相化しながら名辞の相関者に対して根本的な機能を果たしている。しかし、本来の意味で名辞の意味の機能がはっきり浮き上がる場合は、名辞が複合名辞か高次の意味形成体、例えば、文の分節として現われるときである。この文の場合だと、名辞はその対象や、とりわけこの文の分節となる他の対象に対してまったく特別の機能を発揮する。これは文法的機能である。この問題はこの先で扱う。当面、複合名辞のなかにもすでにこの種の機能があることを取り上げておく。「赤い滑らかな球」という表現で、「赤い」と「滑らかな」の孤立語がこの表現の構成要素となった場合、この二語の意味にどんな変化が生じるか注目してみよう。二語のいずれも別々にとると二語ともそれ自身の質料的内容と形相的内容のほか、この名辞（例えば、「赤い」）の対象を指している方向指示因をもっている。この二つの形容詞がこの複合的表現の構成要素となると、とたんに自らの対象に対して全く特定の機能を果たすようになる。まずこの二語が別々のときの変数的で潜在的であった方向指示因は特有な仕方では——絶対的にか、もっぱら相対的にか——固定化され顕在化される。すなわち「球」の語が指す同一対象に間違いなく向けられる。この「球」の語の方向指示因が固定されていると（例えば、発語中、指でさすときだと）、「赤い」（もしくは「滑らかな」）という語の方向指示因も固定化され、まさにそのことで完全に顕在化される。それに対して名詞の方向指示因が変数的であると三つの方向指示因すべての特殊な「収斂」現象が起こる。これは二つの異なる事情によっている。第一に、この表現の構成要素たるすべての語の方向指示因の変域が変わり、つまり孤立語にとってそれぞれ違っていた変域が、結合処理を受けて制約し合う（適合し合う）。その結果、表現全体の方向指示因の一つの変域が確立される。第二に、それぞれの方向指示因の変域がこのように適合し合えるのは、それらの方向指示因そのものが同時に一つに絞り込まれることによる。こうした表現全体は、こうしてできた方向指示因が単射的で固定的となる以上、たった一つの対象に向かうことになる。しかし、このように方向指示因が一つに絞られることは、いわば三つの違った意味形成体が統一化をいちじるしく深めて単一の意味単位になることの外的表現にはかならない。この統一化は、それはそれで個々の形容詞の修飾機能を基盤としている。孤立語「赤い」はその質料的内容と形相的内容によって「赤さ」の契機で質的に規定されたある対象を樹立はしても、その対象の本性に関して、したがって赤いものの本体は何かということに関して無規定のままであ

る(原²²)。「赤い」という語の、完全に展開された、でもそのことで間違いなく変容を受けた意味でもっておおまかに表現されるものは、「何か赤いもの」ということである。【おおまかにと言うのは、「赤い czerwona」という語が何か赤くて「女性的なもの」を指しているからである。〔ポーランド語の形容詞 czerwona は女性の変化語尾をもち女性名詞を要求する。〕それに対して「何か」という語は、「漠然としたもの」を指す。こうしてもその本性に関してまだ無規定のままである。その語義がこういった意味で独り立ちしていないので、どうしても「赤い」という属性の主体が「何」であるかを定める補足が要求される。ドイツ語の「rot」はその意味に性別がないので (roter [男], rote [女] 等と比べて)、ポーランド語の「czerwona」「czerwony」よりももっと独り立ちしていない。そのためポーランド語でその厳密な意味を与えることはできない。】しかし、「赤い」という語が名詞「球」に結びつけられるとそれ自身の志向的対象を失う。それが失うのは自らの対象に対して特殊な機能を果たすからである。名詞につけられた「形容詞」はそれとしては、名詞「球」によって樹立されその本性の点でまさに「球」として規定されたものと同じものであるかの如くに自らの志向的対象を扱うことになる。よって修飾語の機能は、(1) それ自身の志向対象を、結びつく名詞の対象と同一化し、よって(2) この対象を赤さという契機で細かく質化することにある。その結果、しかるべく変容を受けた対象は「赤い滑らかな球」という表現全体の相関者として、今や、単独の形容詞が持っていた質的規定のいっさいを持ち合わせることになる(原²³)。

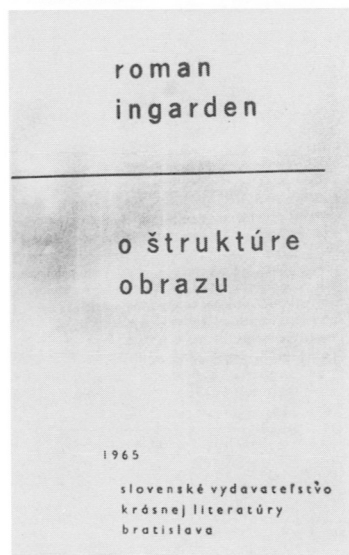
以上の事例が示す通り、名辞の意味もその対象(自らの対象もしくは他の対象、つまりそれと結びつく別の名辞のそれ)に対して特定の機能を果たすことができる。それゆえ、この種の機能を果たすか否かによって名辞と機能小詞の意味を、区別することはよくない。よって、名辞の意味の本質の説明は完全でない。そこで名辞と機能小詞の区別は、はたす機能の違いによってできるのではないかという考えが、確かに浮かんでくる。しかしながら、働く機能の数が多く、それとつながる機能の種類と種類間の関係も見通しにくく——特に機能小詞のこれまでの不十分な研究では——両者間にきちんとした区別を設けることは難しすぎる。この区別の条件を名辞の意味における形相的内容の特性のなかを探し出す考えの方が、見込みがあるろう。つまり名辞の意味は形相的内容の本格的な協力をえて最初に志向的対象を規定(「樹立」)し、しかるのちにその一旦構成された対象に対していろいろな機能を働かしている。しかるに、機能小詞の方はそれとしてはいかなる対象も樹立できな



〈写真 16, 17/複〉〔註〕

▲『美学研究』ロシア語版 (1962)

▼『絵画の構造』スロバキア語版 (1965)



いのである。機能小詞は別の語義によって、普通は名辞の意味によって樹立された対象に対して形相的にも質料的にもいろいろな機能をはたすだけである。ここに例えば、「i lub jest [and or is]」の表現のように機能小詞だけが結びついてもおおよそ意味単位をなさない理由がある。よって名辞的表現の対象を樹立する形相的内容こそが、その表現を「名辞的」たらしめるものであり、またプフェンダーと共にそれを「対象的概念」として性格づけるのが正しいと思われる。こう考察していても、次のことに注目するとまたしても困難が新たに出てくる。第一に名辞の意味はその形相的内容に関して随分違ってくる。それは、物、性質、状態、過程、活動、関係などの形相的構造を規定できる。第二に少なくともいくつかの形相的内容は名辞とは根本的に異なる語義に、つまり、「動詞的」表現のなかにも出てくる。第一のことに関連していうなら、すべての名辞の意味に出現するような形相的内容が、少なくともその種の特種契機が、存在するのか、これは怪しい。そんな便利なものがあるなら名辞と機能小詞とはそれを用いて対置できるばかりか、一般に名辞の意味の本質を窮極的に発見できるであろう。第二のことからすれば、名辞と動詞とを対立させ、両者の相違を比較してみなければならぬ。これは言明文（ないしは文一般）の本質把握に積極的に役立つ。

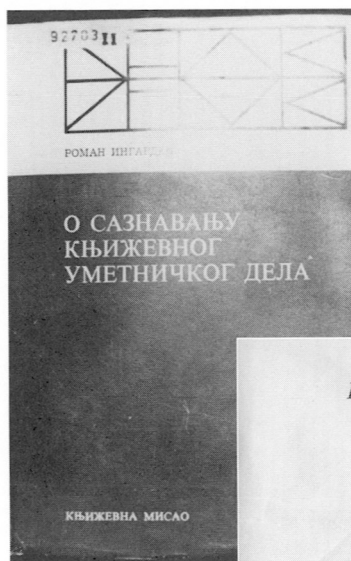
【しかし、このことに移る前にもう一つ指摘しておこう。名辞と機能小詞とは、今後

の分析にとって重要な相違点がさらに一つある。つまり、名辞の意味はたくさんの異質な構成要素のひとかたまりであるといつてよい。それに対して機能小詞の意味は一般にこの種の沢山の要素を示さない。例えば、定言文に現れる「jest [である]」のように、そこで同時に果たされるいくつかの違った機能がある場合だと、その機能を互いに区別できるだけでなく、それを仕分けしてその働きを二、三の機能小詞にまかすことが原理上可能である。まさにこうしたことをしたのが、B. ラッセルであり、定言文の小詞「jest」の機能からいわゆる「主張機能」(プフェンダーでは「Behauptungsfunktion」参照、『論理学』前掲書182頁)を抜き出し、それを「主張記号」(†)として文頭に置いた。このことによって小詞「jest」に、まだかなり複雑な「述語」機能(プフェンダーの「Pradikatsfunktion」)だけが残った。それに反して、名辞の意味のいろいろな構成要素を仕分けして、例えば、片方に質料的内容をもっぱら含む意味を、片方に形相的内容をもっぱら含む意味をつくりだすことはできない。ところで人が、構成要素が異質でかつ非独立的な内的なまとまりの名辞の特殊構造に、名辞の本質を探り当てようとしても、われわれが先ほど直面したと似たような困難にすぐに直面するのであろう。なぜならば、動詞的表現の意味にも、それと似たか、同じ類の特徴が認められるからである。といつても、名辞と動詞とは本質的な区別があるように思われる。よって今度はこ



〈写真18, 19/複〉〔註〕 ▲『文学作品読書論』のチェコ語版(1967)
▼オスロ講演のノルウェー語版(1970)

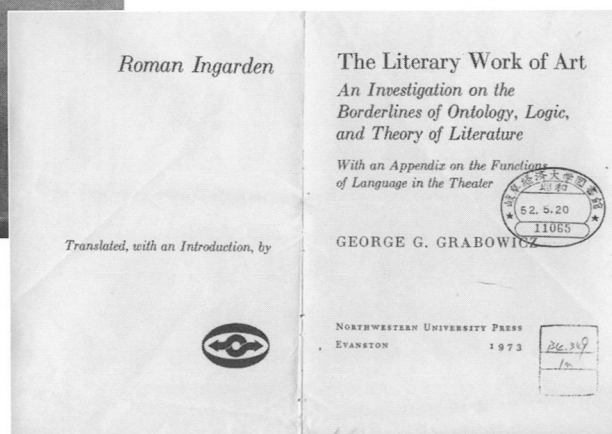




〈写真 20, 21/複〉〔註〕

(左)『文学作品読書論』のユーゴスロバキア語版 (1971)

(下)『文芸作品論』第二版の英語版 (1973)



の二つの種類における意味形成体の関係を研究する必要がある。】

III. 定動詞の意味

差し当たり単独の(原²⁴)定動詞を取り上げその「定形」のものに注目しよう。例えば、「書く」, 「立った」, 「横になれ」, 「歩く」, *amatur* [ラテン語 *amo* (愛する) の3人称単数], 「愛される」である。定動詞の意味のなかには名辞の意味における同じような各種の構成要素があるのだろうか。

まず定動詞のなかにも「質料的内容」があることは間違いない。「文法形式」がそっくり同じ動詞, 例えば、「書く」と「歩く」[共に3人称単数現在形]に注目すると、両者の意味の相違となるのは両者の「質料的内容」である。この二つの語で扱

われるものは「活動」であるとよくいわれる。それぞれ別の活動がつまり質的に違った規定を受けた活動である。これに反して「歩く」「歩いた」「歩くだろう」等の語には「文法形式」の違いにもかかわらず同一のことが現れる。つまり同種類の活動である。別言すると、定動詞の質料的内容は、どのような活動が、どのように質化された活動が、扱われるかと決定する意味の構成要素となっている。すると、名辞の質料的内容と定動詞のそれとの間に区別がないように思われよう。またこれに資する事実もあるようだ。「書く」と「書くこと」という二つの語を比較しても同一(か同種類)の意味要素が捉えられる。つまり両者においてそっくり同じ種類の活動が扱われている。すると二つの語の相違は、とりも直さず二つの種類の相違は、それらの意味に、異なった形相的内容が現れるにすぎないことではないか、形相的内容とは、この語で思念されることの形相的構造を規定するところの語義の構成要素のことではなかったか。また「書く」「書くこと」の語で思念されるものは同じ構造を、つまりある「活動」という構造をもちはしないか。たしかにその活動が「名詞的に」思念されもするし、「動詞的に」思念されもするが、こんなことは二つの語の意味にとって、まったくどうでもよいことではないか。これは、よくいわれるように、「文法的」性質の違いだけのことではないか。ところで、「書くこと」という語が名詞であるというそれだけの理由で、何か物が扱われていると考える人はおるまい(原²⁵)。【同様に「trawa zielenieje」[「草が緑になる」zie liniejeはポーランド語では動詞]】といっても、ある活動が扱われていると考える人はおるまい。単に「緑色である」だけのことで、「ますます緑色になる」ことは意味していない(原²⁶)。純粋な文法的意味では動詞的「概念」であっても、草の緑色はここでは草のある性質として考えられているのだ。したがって、名辞の意味によく現れる形相的内容がこの「動詞」にも現れる。よって名辞の意味と動詞の意味とに本質的な違いがないのではあるまいか(原²⁷)。取り上げたこのような反問の論点は、正しい点もあるが間違っている。この反問は対比される二つの語のタイプの表面的な分析に発している。】動詞と名辞の相違は多くの点で認められる。名辞の意味のなかには、なによりもまず方向指示因が現れるように、定動詞の方にはその質料的内容によって(例えば、「書く」の語)(原²⁸)規定された活動を指示するようなこの種の方向指示因が欠如している。しかしながら、方向指示因の有無では二種類の語の大きな違いはきまりそうもない。大きな相違を見つけるには、それを二つの語のいろいろな範疇に出てくるある種の構成要素の有無に求めるのでなく、むしろ意味の志向

性の全く別のタイプに、つまり当の語の志向的相関者が動詞や名辞でどのような仕方で樹立されるか、その仕方に求めるべきである。この視点から「書くこと」と「書く」語（よってそっくり同じ質料のおよび形相的内容をもった語）を、例えば、対比させてみれば、はっきりと目につく。「書くこと」の語だと特定の活動が、別の名辞だと「物」「物質」「状態」等が何かできあがったものとして、いろいろと規定され限定された出来合いのものとして、そしてその限定が一挙にひとつかみできる単位として「樹立され」ていて、それを樹立している語（あるいは当の名辞を用い、その意味志向を取り上げる心理主体）に対立し、いわばそれと「向き合っ

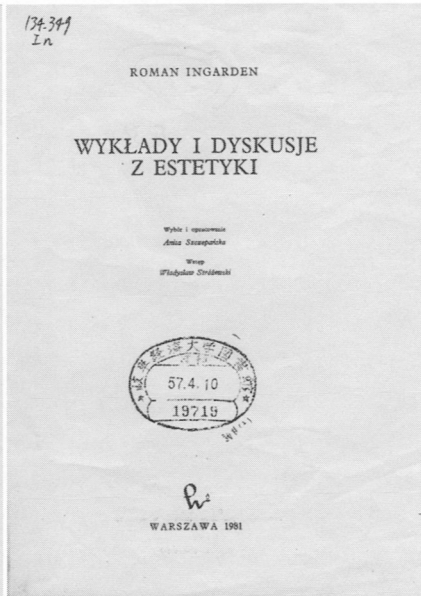
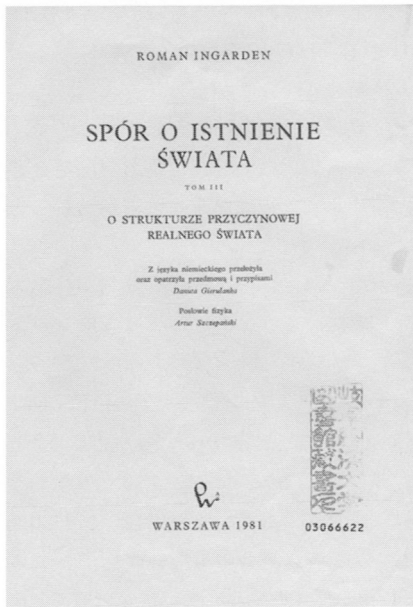
ている。この対立^(原29)があつて初めて名辞の意味の活動やそれぞれの対象が方向指示因の直接目標となる^(原30)。

したがって、ある意味を「名辞的」であると決定するのは、意味の質料のおよび形相的内容のさまざまな内実ではなく、むしろ意味の志向的相関者の創り方、その思考的な樹立の仕方にほかならない。別言すれば意味内容の志向性の特殊なタイプである。それにこの仕方が名辞の志向的相関者の当の性格に反映される。この仕方、このタイプをまた別の視点から特徴づけるなら、「出来上がった」形相的図式（特殊な変容であれ）が形相的内容によって静的に樹立されることである。この図式には質料の内容によって質的契機がこれまた静的な仕方にて「充たされる」。もちろん、私がこの図式が質で「充たされる」と言つても、比喩的表現を用いているだけで、最初に形相的構造から自由な質的契機が存在するとか、また質的規定を一切欠いた形相的図式が存在するとか、名辞の意味によってはじめて両者が織り合うとか、と解してはならない。質的契機とその形相的構造は、名辞の対象のなかで切っても切れない形で一緒に現れるのである。それにしても静的な、「充当」、帰属、付与的等の比喩的な言い方は、名辞の志向性の特殊な違いを性格づけるのに向つてつけの表現である。規定を名辞的な仕方にするとな辞の意味のなかに、名辞対象をただちに指す方向指示因がもたらされる。すでに幾度か指摘しておいたように、名辞の意味は有機的に組み立てられたまとまった単位であり、そこではすべての要素が意味的に共属し合い条件づけ合う。それだけでなくすべてが一つの方向で協働する。むろん、「非鉄的鉄」「四角な円」のような内的矛盾を孕んだ名辞は論外である。名辞がこのように機能する要素がすべて集まって行うのが、名辞の意味で志向されるものの「対象化」なのである。これが名辞の意味によって果たされる名辞化機能の特徴となる。プフェンダーが、彼のいう「対象概念」でなされる「実体

化」について語るとき、おそらく、彼はこの対象化を念頭においていたと考えられる。しかし、この対象化は何も名辞の志向的对象の形相的構造と結びつかないし、それとも合致しない。形相的構造を決めているのはまさにその形相的内容である。ある活動性をもつ名辞についてこの「対象化」が成り立つ場合は、この活動性(特殊な属性の主体として、展開中の存在者として)がその活動性格の点で静的に把握される場合に限られる。よってこの対象化は問題とされる形相的構造と同一でない。というのは、例えば、活動性が、名辞の形相的内容によってまさしく活動性として把握される。このことは、定動詞によって純粋な形で明確に把握される。名辞では、この活動性が属性の主体たることは静止的にしか達成されない(原³¹)。一般に、それが何であれすべてのものは、当然その属性は除いて、「属性の主体」となる。それが、「実体的な」物であれ、全面的に限定された、独立的な物であれ、はたまた行為、出来事であれ、関係でも、まったくかまわない。しかし、存在するものであれば何もかも「属性の主体たる」点で、かならず捉えるべきだとする必然性はない。名辞の意味は志向性の特殊なタイプによって一切の存在のうちのこの特殊な「面」を際立たせるにすぎず、こうしたからとてその形相的構造は少しも変わらない。しかし、志向的規定の名辞的な仕方は、何も言語表現の志向的相関者に関係する唯一の可能な仕方ではない。純粋な動詞的表現ではこの仕方は異なってくる。例えば、「書く」という語義は、その志向的相関者と属性の主体の構造では捉えられない。この語の質料的内容は動詞の形相的内容によって捉えられる活動性の質化を規定するが、それは時間における本来的な生成、展開においてである。これは名辞の質料的内容の場合だとまったく違った風になる。なぜならば、属性の主体が一般に語義によって樹立されないか、あるものが属性の主体の観点で理解されないなら、その質化も属性の主体の規定としてなされないからである。ところで、定動詞の意味では、ある過程(活動)が展開される。「質料的内容」という用語を、また用いてもこの場合、まったく正当だが、質化の仕方が違っているという条件つきである。どんな仕方なのか——疑問が起こる。

「書くこと」という名辞では、活動がかくなる存在として静止的に捉えられる。それは対して「書く」の語ではこういったことは全然ない。この活動は、こんな表現を用いてよければ、進展中のこと、生成中のこと、として展開される。進展、生成、遂行として流動的に展開されるといった方がよい(原³²)。この場合、この活動は純粋な生起(事象)の性格の形で展開され、この生成の形で描き出され、属性の

主体としては捉えられない。まさにこの「純粋な事象の流動的展開」が、定動詞の本質的な機能となる(原³³)。動詞はこの純粋事象と特定の質化を受けたものとして展開する(繰り延べる)。その質化とは、例えば、人が「読む」という活動と、「書く」という活動との相違を決定する契機にはかならない。この相違は動詞の質料的内容によってきまる。ところでこの質化だけでは、また動詞の形相的内容の内実(これは通常の場合「活動」という事象の形相構造を規定する)では、定動詞を名辞から区別するものとはならない。この相違は、動詞の質料的内容および形相的内容による活動のまったく独自の「展開」様式から来ていて、この活動をその本性と属性の点で、名辞的にいきなり一つかみに捉えるのとは対照的である。この活動の動詞的展開様式が、動詞の意味からこの活動に向けられる名辞的方向指示因を排除するのである。最後に、この様式によって定動詞がいろいろな「時制」で直接(つまり付加語なしで)現れることが理解できる。活動を「今」展開中のものとしたら、ときには「過ぎ去った時に」展開した活動として質化する(原³⁴)。多くの言語、例えば、ポーランド語やフランス語では、過去におけるこの活動の「展開」は、時間遠近〔現在を起点にした近い過去、遠い過去〕をいろいろ映し出しているさまざまな仕方で行なわれている〔ポーランド語では、同一の語義の動詞に完了体と完了体があり、フランス語には半過去、単純過去、大過去、前過去がある〕。意味要素を付け加えて明示化させずとも文法形式を変えることによってこれができるところに特徴がある。ここにまたしてもいきなり扱われるのは、名辞に現れるタイプには間接的にしか切り換えられない志向性の別のタイプである。このように質料的内容の構成要素を新たに説明せずに、いきなり時間において、その展開のさまざまな遠近において直接理解することは、名辞だけをいくら用いても不可能である。確かに、「かつての出来事」とか「現状」とか「今ある家」とかということはできよう。しかし、こうしたことができるのは、この複合的名辞の意味の質料的内容に現れる特別の構成要素が、それとして当の名辞の対象を時間の観点で、名辞的に特徴づけているからである。しかし、この名辞はその質料的内容および形相的内容の残余の構成要素によって、この時間観点から規定されているわけではない。しかるに、定動詞にあっては、その語義の質料的内容や形相的内容に、時間規定の特別の契機が現れなくとも、活動の直接的性格づけがなされる。このように活動を時間的に捉え描き出す仕方が定動詞の特殊機能である。これが定動詞を他の「言葉」から本質的に区別しているのである。定動詞の意味と名辞の意味との相違点は、次の点に注目するともっとはつき



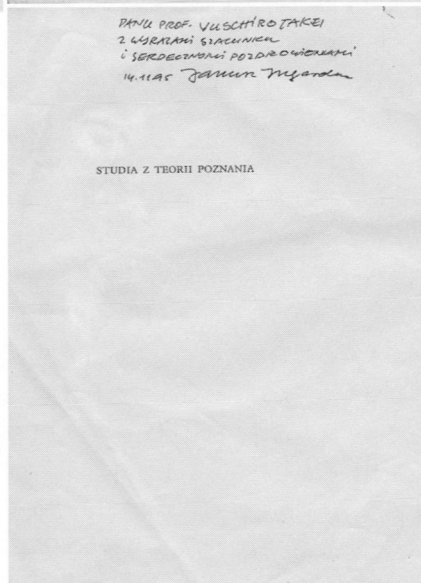
〈写真 22, 23, 24/複〉〔註〕

80-90年代に出版されたインガルデンの
ポーランド語哲学選集

(上左)『世界の存在をめぐる論争』
第3巻 (1982)

(上右)『倫理学講義と論義』(1992)

(右)『認識論研究』(1995)



りする。どの定動詞もそれだけ孤立させて取り上げれば、いずれも、補足を必要とする意味をもっている（フツサールの意味での「非独立」である）。それに対して名辞の意味は少なくとも独立的でありうる。すでにこのことから分かるように、定動詞は *de iure*（権利上）、もっと高次の意味単位への帰属を特徴としているので、それを孤立させて扱うには特別の抽象によるしかない。孤立した定動詞が補足を必要とされるのは、そこに名辞の方向指示因と似かよった特殊な意味要素があることによる。さてこれを論じなければならない。

動詞が定動詞になるのはとりわけ、文法書に書かれているように、動詞が特定の「人称」と「数」をとることによる。この場合、周知のように、二つの違う形式がありうる。つまり、孤立した *amat, legimus*〔ラテン語 *lego*（読む）の一人称複数形〕か、【同じく、ポーランド語の「*kocha*〔*kochać*「愛する」の三人称単数〕、「*czytamy*〔*czytać*「読む」の一人称複数〕〕か、それともドイツ語の、例えば、*er schreibt*〔彼は書く〕、*wir gehen*〔われわれは歩く〕等の形式かである。孤立した *amat* も *ich denke*〔私は考える〕も二つの違った仕方 で用いられたり理解されたりする。つまり（1）文として、（2）孤立した *verbum finitum*〔定動詞〕として。前者の場合の事情についてはこの先で（参照、第十九節）扱う。さて *amat*、【「*pisze*」〔ポーランド語 *pisac*「書く」の三人称単数〕、「*czytamy*」等〕の表現を孤立した動詞として取り上げて考察しよう。例えば、*amabam*〔*amo*の一人称過去〕と *amorem*〔*amo*の一人称接続法過去〕との二つの文法形式を比較して、その意味の相違をはっきり意識したいとか、あるいは、私がドイツ語を教えるとき、*er denkt*と口にだして三人称単数形を取り上げる場合だと、その *er* は文の主語として用いていないし、*denkt* も文の述語として用いていない。ここで *ich, du, er (sie, es)*〔私、君、彼（彼女、それ）〕を用いれば定動詞の意味の構成部分は表面化する。この構成要素は定動詞の意味全体のなかにならず含まれているが、他の言語、【例えば、ポーランド語やラテン語では表に出ない。それでもその要素は考えられている。「*pisze*」は「*on pisze*」〔彼が書く〕とそっくり同じである。ただこの「*on*」を付け足す必要がないのは、「おのずから分かる」からである。それでも付け加える場合は、語の全部の意味を述べたいか、完全な文を作りたいとかしたときである。】しかし、ドイツ語で *er* の語を用いると、表に出てくるこの動詞の意味の要素は、文の主語として機能する *er* と同一視できない。もし文としての *ich denke* と単独の動詞としての *ich denke* との間に何の相違もないとしたら、よって両者のこの *ich* がまったく同じ意味をもつとしたら、例えば、*C. J.*

Ceaser exercitum contra hostem misit [シーザーは敵に軍隊を向けた] という時、どうして同時に二つの主語をつくらないのか了解に苦しむだろう。また例えば、*exercitus Romanus hostem vicit* [ローマ軍が敵を打ち負かした] という文で、文の主語がすでに *vicit* の語に含まれているなら、簡単に *hostem vicit* といえはよく、どんな目的でもってかく言うのか納得がいかないだろう^(原35)。私の間違いでなければ、孤立した *venit* [venio「来る」の三人称単数] のラテン語形式の方がドイツ語の *er (sie, es) kommt* の形式よりもはるかにその意味に適合している。というのはドイツ語の形式は、その動詞の意味における特定の要素を表に出している点で一步先にいきすぎていて、特別の小語 [er] を用いることで、その意味に文の「主語」の外見をかもしたすからである。この「主語」は動詞の意味の構成要素にとって無縁なものか、その許されない補足である。確かに、定動詞の意味全体が、人が文章をつくることをうながし、語義の構成要素(多くの言語では「人称」の文法形式で与えられる)と特別の小語、つまり指示機能小語でもってはっきりさせることになる。動詞の意味のこの構成要素は活動に属するものを、その活動の背後にいわば隠れているものを指摘する機能をまさにはたすからである。〔く〕内はドイツ語第一版からの訳出〕この構成要素を「背後指示因 (rückweisende Faktor)」と名づけておこう。動詞の質料のおよび形相的内容によって展開される活動は、ここである活動主体^(原36)によって遂行されるものとして直ちに考えられる。いうなれば、背後指示因の構成要素は、この活動の何かの(能動的もしくは受動的)担い手、遂行者を探す。*amat* の語は、一般にこの愛を行なうとすれば「愛する」誰かがいなければならないことを語っている。しかし、これだけではまだ動詞の背後指示因が活動主体を「探し当てた」ことにはならない。別言すれば、その種の行為者が存在して、この活動がこの人から流れ出て、その人によって実現されたり、遂行されたり、経験されたりすることは、この語義だけでは言えないのである。それは文になって初めてできる。孤立の定動詞では、この人は詳しく特定されていない(常に任意の「彼」か「彼女」か「私」かである)。それだけでなく、存在するものとしても捉えられていない。定動詞はただの主体を要求し、背後指示因によってそれを指示しているにすぎない。この背後指示因は活動主体をこの活動を成し遂げるものとして指す。とりも直さずこのことによって動詞の意味によって展開される活動そのものも、純然たる生成中の活動として描きだされるが、活動の主体によって「実際に」成し遂げられた活動としては描きだされない。定動詞の意味に、探し当てる要素が

存在すること、動詞の背後指示因と呼ぶ指示要因が活動主体を求めること——このこと自体、孤立の定動詞の非独立性のすぐれた表現となっている。しかも孤立の動詞にあっては、この背後指示因は常に変数的で潜在的であり、活動の遂行者を曖昧の状態にしておき、こうもいってよければ、そこに手が届いていない。それと名辞が方向を指示している限り、この背後指示は行為主体に手が届く定数的、顕在的指示に移れない（単独の名辞の意味ではこれが可能である）。背後指示が動詞の質料的および形相的内容によって、活動には向かわずに、むしろ逆に活動そのものと本質的に結びついてはいるが、それとまったく違うものを指すこともある（原³⁷）。しかし、名辞の方向指示因と動詞の方向指示因とに類似点もある。定動詞の複数性は、例えば、昔の「両数形」のように一義的に規定されるか、いわゆる「多数形」のように特定されないかのいずれかである。この相違によって探し当てられる活動主体がその数に関して特定数とか、一つだけとか、多数とかになる。だがこれとあいまって定動詞によって規定される活動そのものも、一発のものか多発のものかによって特徴が出てくる。後者の場合すべての活動は一緒に（同時に）起こるものとして樹立される——【例えば、*piszą, biegną* とか *pisali, biegli* とかである〔いずれも複数形で「書く」「走る」「書いた」「走った」〕】。

これですべての定動詞の意味構造が明らかにされたように思われよう。ところが、そのなかには、例えば、「ヤンがビョートルをなぐる」「ヤンがベートーベンのソナタを聴く」等の文に現れる「他」動詞もある。「なぐる」「聴く」「読む」「与える」（何かを誰かに）等の語はその質料的内容によっていわゆる「他に及ぼす」活動を規定する。よってそれはその活動を果たすのは誰（何）かだけでなく、誰（何）に向けられるかをその活動の本質としている。これは（誰かを）「なぐる」とか、（何かを）「聴く」とか、（誰かに何かを）「与える」といった語の sens〔語義〕である。よって認めねばならないが、このようなケースでは定動詞の意味のなかにもう一つの方向指示因が（「誰かに何かを与える」という表現のときだと二つまで）現れる。今度は活動の主体を指すのではなく、活動の対象を指示する。〔訳³⁸〕。この新たな「対象を指す」方向指示因は、孤立した動詞だとこれもまた潜在的で変数的であり、この種の動詞の意味がさらに非独立的であることの現れとなる。つまり何かの名辞によって（しかも、しかるべき構文機能において！）補足されることを要求している。補足によってこの方向指示因が「充たされる」だけでなく、顕在化し固定化する。というわけで定動詞はその方向指示因によっていろいろな方向で別の



〈写真 25/武〉〔註〕
復活祭への準備, 切り
紙細工師の実演 (1978 年
撮影)。

意味と結びつき, それと共に高次の形成体, つまり文を創り出す。定動詞が「文の作り手」(定動詞だけで文を作ることができない以上, これだけでは正しくない)であることによく目は向くが, 動詞の意味の何が文作りに役立つかの方面には目が行かない。ここで述べた方向指示因が, これだけとは限らないにせよ, 重要な役割をここで果たしてしているのである。しかし, このことについてはこの先で触れるつもりである (参照, 第十九節)。【1958】

以上で名辞の意味と定動詞の意味との違いは明らかになったと思う(原38)。

註

(原1) 参照, E. フッサール『論理学研究』第2巻, 研究IとIV。

(原2) 参照, A. ブフェンダー『論理学』„Jahrb. f. Philosophie“, T. IV (1921). 「概念」という用語がここで当を得ているかはこの先で示そう。

(原3) ブフェンダーはこれを「論理学」のなかで「対象概念」と呼んでいる。わたしは以下の考察のなかで語義と概念を区別するつもりでいるのでこの用語は使用しない。

(原4) 前もってつまらぬ誤解を招かないためにはっきり言うておくが, 語音によってときに表出される話し手の具体的な心理的体験や心理状態も, 読書によって準備体制におかれる当の事物の情景も, 語の「意味」には入らない。またそれらは語音とも「結合」しないし, 語句にも属さない。それらが考慮される場合は, 生きた会話で語の各種の機能を果たさせるときに限られる。参照, E. フッサール『論理学研究』第2巻, 研究I。

(原5) フッサールは『論理学研究』で語の「意味」と「その対象との関係」(「gegenständliche Beziehung」)とを区別している(同掲書第2巻, 研究I, 第十二節と十三節)。私がよく理解するところでは, フッサールは私がここで「質料内容」と「方向指示因」と名づけたものの区別を扱っている。たしかに彼の事例は私の区別とすべて合致するわけではない。フッサールによれば彼のいう「意味」のみが表現(「Ausdruck」)の本質となる。これが正しい場合は, その意味も方向指示因を含まない場合に限られる。それに反して名辞の意味の本質には方向指示因が入る。なお, 名辞の方向指示因が, 「命名」機能とどのような関係にあるかをもっと詳しく考察する必要がある。【なかでも K. トワルドフスキは命名機能を表現機能や「意味」機能に対置させている(参照, 「表象対象の内容の理論」11頁以下)。残念なことにトワルドフスキによれば, 「意味」機能は, 名辞が聞き手に表象体験を喚起する点にあるとされる。

よってこの機能はわれわれの「語義」と共通するところは何もない。そのため名辞の他の機能と, ここで私が詳しく述べているものと, を比較することは大変難しい。】[1958]

(原6) プフェンダーは「単数概念」と「複数概念」とを区別しているが, 方向指示因を語義の他の要素から区別していない。よってプフェンダーでは, 単数概念と複数概念との区別が, 何によるものか明らかでない。

(原7) フッサールは, 『論理学研究』においてこの事実に着目していたが, 方向指示因の概念は導入していない。【彼が, 「ein A」の表現のもつ普遍性機能について語る時, この変化性を念頭に置いていたことはまず間違いない。(参照, 同掲書第2巻147頁以下。)]「述語的機能において「ある A („ein A“)」という表現は, 限らない沢山の定言的陳述における述語として用いることができる。そしてこの種の真の陳述ないしそれ自身可能な陳述の総体が, 可能なすべての主語を規定するのであって, その主語には, 「ある A」であるということが帰属するか矛盾なく帰属する。したがって, 一言で言えば, 「概念 A」の真の外延ないし可能な外延を規定する。……「ある (ein)」という小語が表現しているものは, 意味志向ないし意味充実に明証的に帰属する形式であって, しかも意味志向が何を思念するかに関してである。」それはまったく還元不可能な契機であり, その独自性は承認するしかなく, 心理学的・発生的考察を手がかりに, それを取り除こうと思っても無駄である。理念的に言えば, その「ある」は本来的な論理的形式を表現しているのである。」これに反して例えば, T. コタルピンスキが本『認識論 形式論理学, 科学方法論の基礎』でしているように, 「ある机 jakis stoł [単数形]」の意味の「机 stoł」という名辞は, 多くの対象(もっと正確に言えば, 一対象以上のもの)を指すとはいえない。これができる名辞は多放射の方向指示因を持つ名辞のみである。例え

ば、「もろもろの机 stoły [複数形]」である。したがって、プフェンダー流に言えば複数名辞である。】[1958]

(原8) 【したがって、この契機は対象の「二重に非独立的な」直接的モルへの契機に属する[*]。】参照、R. インガルデン「本質的問い」62頁以下。[1958]

〔*〕〔この註(原8)は分かりにくいので、次の二つの説明で補足しておこう。インガルデンは、物事を考察するさいに、物事の一般的性格を「定数」として、その個別的性質を「変数」として両者の関係を考察する。「定数」と「変数」はインガルデンの重要なキーワードである。〕

インガルデンは巨作『世界の存在をめぐる論争』の存在論で、純粋思考的存在と実在的存在と併せて理念的存在を積極的に提示している。彼によれば理念はその形相構造において二つの特徴をもつ。

(1) 理念的存在は、人間の意識に他律的な純粋志向的存在(例えば、文学作品)や自律的な実在的存在とその存在様式を異にしている。それは存在自律的で超時間的ないし脱時間的存在である。

(2) 理念はその内実として定数(Konstante 定常部)と変数(Veränderliche 可変部)をもつ。(訳者はこの訳語として数学用語を採用した。)

定数は理念質(Wesenheit 本質性)の理念的具象化であり、理念の対象の構成本性を成す。それに対して変数の特定化はその対象の個的構成本性を成す。

インガルデンは、(2)の事柄を幾何学的対象の四角形に事例を求めて説明している。平面幾何学の対象はまぎれもなく超時間的な自律的对象であり、人間の意識に関わりを持たない。

「四角形一般」(四角形性)とは四つの辺と四つの内角をもつ。これらは形相としてじかに直観できる。そして内角の和が四直角である。後者は証明を必要としよう。これらは四角形性という理念的の内実の定数であって、三角形性、円形性から区別される、四角形性が四角形たることの構成本性をなす。

四角形性においては四つの辺の長さ、四つの内角の大きさは任意であって特定されていない。それが特定化された場合、平行四辺形、ひし形、正方形、長方形、矩形、台形、四角形が成立する。ということは四角形性という理念内実に定常部としての定数と並んで可変部としての変数があり、それが特定化すると個的な四角形が成立する。インガルデンはこれを変数の特定化による理念的具象化と呼んでいる。例えば、向かい合う辺の長さが同じで、向かい合う内角が同じであれば平行四辺形性となる。四つの辺、四つの内角、二本の内角線、内角の四直角は定数として変わることはない。また同じ平行四辺形でも辺の長短によって特化し、多様化する。平行四辺形とひし形は対角線が直交するか否かによって決まる。ひし形の個的本性を構成するのはこの対角線の直交となる。よって四角形の多様化は一般にその理念内

実の変数部分の特定化によるものと見ることができる。

そこでその「一般的理念の内実の直接的 $\mu\sigma\phi\alpha\iota$ は二重に非独立的である。」という表現は、平行四辺形に例をとるなら、平行四辺形という理念的形相は一方では四角形性という定数によって規定され、他方向かい合う辺が平行であるという、定数にはない特定規定によって（定数中に含まれる変数の特化）規定される。一言でいえば、平行四辺形は四角形性という構成本性と、向かい合う辺が平行であるという個的構成本性によって二重に規定される。

「直接的 $\mu\sigma\phi\alpha\iota$ 」という表現はヘーリングの用語であって、この事例では四角形性という^{イデア}形相を指す。この点については次の第十六節も参照のこと。

じらい、形式論理学では四角形一般とその多様な四角形は概念の内包と外延で捉えられ、インガルデンの理念内実の定数と変数の観点は皆無である。ここで注意しておくが、インガルデンは四角形一般の多様な四角形への理念的具象化 (Konkretisierung) と、例えば、四角形の実在的な板の四角形への実在化 (Realisierung) とを峻別している。

インガルデンが、2の説明の処で言わんとするところは、名辞の意味の質料的内容のなかの変数部分は方向指示因の潜在性を含み、この変数が特化するに応じて方向指示因が顕在化してくるということである。したがって、インガルデンが「定数的で顕在的」とか「変数的で潜在的」とかの「定数」と「変数」の用語をよく用いるのは、先の数学の「定数」「変数」の見解に拠っているのである。]

(原 9) プフェンダー前掲書 299 頁以下参照。

(原 10) 【この志向性の源泉がどこにあり、どんな種類のものであるか——これは問題であって、なお、この先で詳しく扱うことになる。】参照、この先の第十八節。
[1958]

(原 11) 「質的性質」という表現はここでは、対象のすべての（またいわゆる「多種多様な」）規定を包摂する、ごく広い意味で理解されるべきである。この規定は私が『世界の存在をめぐる論争』の第八章で最終的に確定した形相 I の意味における対象の「形相」には入らない。それにフッサールが『論理学研究』で「対象の分析的・形相的契機」について論じている時、すでにこの意味を念頭においていた。
[1958]

(原 12) この主張は必要があつて当面、厳密な定式になっていない。志向的对象の構造と内実を区別した後でも、この主張の修正がきく（参照、第二十節と第二十一節）。
というのは、この主張は志向的对象の内実にのみ関係しているからである。

(原 13) おそらく「ミュラー家」とか「マイエル家」とか「ポトツキ家」とかの姓の「固有」名のあることを引き合いに出して、固有名の音がまったく独自で特徴的であるとするに対して異論を唱える人もあろう。この取り上げた姓が退化した固

有名に過ぎないことは明らかである。その理由は同じ種類の音が多く、の違った個々の人を指すのに用いられていて、一義的でないからである。しかし、これは一般的名辞ではなく、むしろ、できの悪い単一名辞にすぎない。独自でない音からくる多義性を取り除くために、われわれは各種の名前や渾名を付け加えるべく努めている。[1958]

(原 14) 私は本書第一版刊行数年後に個的对象の構造を略述すべく努めた。参照、「個的对象の形相構造について」『哲学研究』誌、1935。最終的には『世界の存在をめぐる論争』第2巻でそれを仕上げた。そこで述べた対象のいくつかの形相は、文学作品の〔描かれた〕対象の層と、そこに見られる特殊性の分析に役立つ。[1958]

(原 15) 哲学の古典家のなかでカントのみが形相的内容に注目している。カントは判断表から「カテゴリー」表を導き出したが、しかし、これを判断との関係でしかせず、この形相的内容がすでに名辞のなかに含まれていることが分かっていない。それどころか、この形相的内容が、そこになければ判断の形相的内容も不可能であることに気づいていない。(「判断形式」が不当にも判断の形相的内容とよく同一視されている。もっとも両者は密接な関係にあるが。)しかし、カントが「カテゴリー」を判断の内容から導出するのではなく、機能においてしているのは正しい。形相的内容の語義における現れ方が、質料的内容のそれと違っていることに気づいていたと思われる。ポーランドの論者のなかで T. コタルビンスキ——このことについて彼はどこにも述べてないが——が、彼のレイズムの考え方を導出するさい形相的内容を認めていたものと思われる。しかし、カントと同じく、形相的内容を名辞の語義全体から導出せず、文の主語である名辞の構文機能から導出している。その結果、形相ないし形相的内容の一つしか、つまり「属性の主体〔担い手〕たること」しか暗黙に認めず、あまつさえそれを(不当にも)「事物」の形相と同一視している。ないしは名辞の「指示物」とするために、事物の形相を規定する形相的内容と同一視している。[1958]

(原 16) これがため、カントが「存在」を「カテゴリー」に数え入れる理由となることは、たしかである。ただし、存在は対象の形相には入らないが。[1958]

(原 17) 「ポーランドの主都」という名辞の意味には、ワルシャワであることは含まれないが、ワルシャワが実際にポーランドの主都である時期にこの名辞が用いられると、どうしても観念連合によってワルシャワが「思い浮ぶ」。しかし、別の時期だとまたクラクフがよく「思い浮ぶ」〔その昔、クラクフがポーランドの主都であった〕。本テキストでは簡略にするために、このすっきりしない表現を用いることにする。[1958]

(原 18) この二つの契機を区別しなかったことが、かつて St. レシニェフスキをして

すべての存在否定の判断は内的矛盾をかかえこんでいるという逆説的主張を吐かせしめることになった。[1958]

(原 19) 私の知る限りフッサールが「論理学」の講義で初めてこのことに注目した人である。この講義を私は 1913/14 年の冬、ゲッティンゲンで聴講した。残念なことにこの講義ノートはあの戦時中に散逸した。しかし、いま思い返してみる限り、フッサールは名辞の二つの存在契機に区別を設けなかった。定言判断の分析と関連して、そのうちの存在性格しか論じなかった。[1958]

(原 20) ポーランドでは St. レシニェフスキが「機能子」の用語を導入した。しかし、彼はプフェンダーの『論理学』を下敷にしてそれを作った。私はプフェンダーの痕跡をはっきりとどめているこの用語を支持する。[1958]

(原 21) これと関連してフッサールの「偶因的」語義についての考察を参照のこと。
〔『論理学研究』第 2 巻, 研究 1〕

(原 22) ドイツ語の *rote* — *die rote, glatte Kugel* という表現の構成要素としての *rote* — は、形容詞の機能や全く単独で出てくるときの語 *rot* と根本的に異なる。*rot* を単独に観察すれば、それは自らの対象を「樹立」しない。その語義は非独立的である。*die Kugel ist rot* という文において初めて小詞 *ist* によってある程度独立する。そして文の主語と一緒に初めて完全な独立体となる。そのとき、文の主語によって指示される対象に属性を帰属させる機能を果す。この機能を果すのは述部全体であり、それに対してこの述部に現れる語 *rot* そのものはこの属性を質的に規定するだけである。ポーランド語の形容詞が、数、性、格の所定の形でしか現れないことに注目すると、この問題はポーランド語では異なる[*]。[1958]

〔*〕〔ポーランド語の *czerwona, gtabka kula* [赤い滑らかな球] の表現では、*czerwona* と *gtabka* の形容詞は女性形で単数であって、単数の女性名詞 *kula* を修飾する。したがって、この二つの形容詞はそれ以外の男性名詞中性名詞、複数形を修飾できない。この二つの形容詞が単独の場合、単数の女性名詞なら何でもかまわない。つまり、それらの方向指示因は潜在的で顕在化しない。〕

(原 23) A. プフェンダーは、前掲書『論理学』(306 頁以下)で、名辞の意味(彼の用語では、「Gegenstandsbegriffe」[対象概念])が自らの対象に対して特定の機能を果すことを指摘した最初の人である。しかしながら、私が本テキストで示した機能とプフェンダーのいうそれは異なる。この問題における彼の個々の論点にも同意できない。しかし、ここは論争の場ではない。こんなことをすれば深入りしすぎよう。私の見解からみてプフェンダーの正しい点は、この考察を進めていくなかで示そう。

(原 24) もちろん、これを孤立としたのは分析のためにわざとそうしたのである。しかし、「形相」を文法的に研究する点でそうした。日常語では定動詞は常に文の分

節として現れる。これは銘記すべきことである。[1958]

(原 25) この問題では、T. コタルビンスキは別の意見の持ち主である。彼は、「ヤンが書く」の代りに「ヤンの書くこと」のような語の使用を禁止している。彼は名詞そのものが、かならず「事物」を指すのに役立つか、それとも私の用語でいうなら、名辞は事物を規定する形相的内容を常にもっていると思見している。これは私見によれば正しくない。[1958]

(原 26) 現行の日常語では、このような表現はあまり用いられないといってもよからう。例えば、ことによっては *tam bieleje snieg* [「その雪は白くなる」*snieg* (雪) が主語で *bieleje* (*bielić* 白くなる) が動詞] といえるが、若干意味が違う。つまりその雪が白く見えるということである。[1958]

(原 27) もちろん、私はあるケースで同じ種類の形相的内容が二つの語のカテゴリーに現れることをもって、名辞の意味と動詞の意味の相違を抹消するつもりはない。逆に私は、あるケースで形相的内容が同じ種類であるにもかかわらず、この相違があるものと断ずる。ある論者たち、例えば、A. Marty マルティはこの相違のあることを否定する。マルティは、特にこの二種類の表現の意味に相違を認めず、その相違を彼が名づける「*aussere und innere Sprachform*」(外言形式と内言形式)の点に求めている(参照、『文と語』)。しかし、マルティが「意味」の下で解するも

〈写真 26, 27/武〉〔註〕

(下) ヤギェウォ大学学生寮「ピアスト」、
(右) Jan Liszka ヤン・リシカ夫妻 (後出の
シチューシコ塔にて 1978 年撮影)。



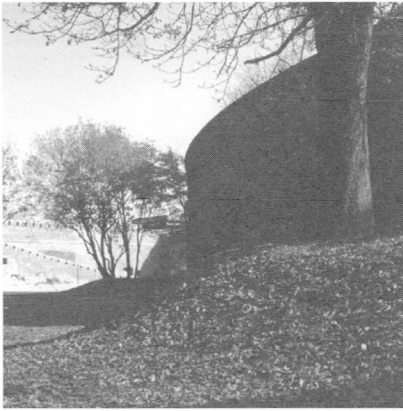
- のは、心理的体験であり、したがって本書でいう語の意味と共通点は何もない。
- (原 28) 強調しておくが、私は定動詞をその純粋な動詞的機能において取り上げ、その形でのみそれを研究する。しかし、定動詞を名辞的機能において使うことができる。これだと先に述べた主張は正しくない。例えば、「彼は一体何をしているのか」という質問に、私が「書いている」と答えるなら、私はこの質問によって樹立される活動を名辞化しているのである。この質問は初めからその活動の存在を前提しているが、ただその活動の性質は与えていない。この活動を特定の性質をもったものに理解して、私は返答においてその活動を名辞化するのである。その場合、「書いている」という語のなかにもこの活動に関係する方向指示因がはっきり出てくる。まもなく示されるように定動詞も、特殊な動詞の使用においてすら、ある特殊な方向指示因をもっている、しかし、これは名辞におけるのとはまったく別である。
- (原 29) H. コンラート=マルティウスはこれを論文「実在の外界の存在論と現象学説」のなかで、「Distanzstellung」(距離設定)と呼び、あるものが、われわれに对象的に与えられることの特徴とみている。(参照、「Jahrb. f. Philosophie“, T. III, S. 470)
- (原 30) A. プフェンダーはこの場合彼の言う「Hauptbegriffe」(主概念)しか念頭に置いていない(それに対して私は名辞のすべての意味を問題にする。したがって彼が「Nebenbegriffe」(副概念)と呼ぶ意味のいくつかも問題にする)。彼は、『論理学』(参照、前掲書 307 頁)でこう語る。「したがって、主概念は独立的対象を樹立することを特徴とはしない。それより主概念において樹立された対象の非独立性が共に思念される……むしろ共通する決定的なことは、樹立された対象が実質上独立的であれ非独立的であれ、主概念が思惟的にそれを完全に限定し、それとして浮き立たせること、簡潔にいうなら、この対象を思惟的に完全化するか実体化することである。」続いてさらにこう付け加えている。「われわれが独立性の形式を論理的カテゴリーと呼ぶなら、この論理的カテゴリーは「事物」の実質的カテゴリーから峻別されるべきである。」(前掲書 308 頁) プフェンダーがこの後者に区別を設け、次の点を強調することでは疑いもなく正しい。つまり、多種多様な形相的構造をもつ対象は名辞の意味によって規定される。そして——私の区別と用語を用いるなら——この対象が事物の構造を樹立する理想的内容を厳密にもつことは、名辞の意味にとっては本質的でない、と。しかし、「独立性」と「非独立性」の対置とか、「実質的に」非独立的なものが「思惟的に」独立的なものになるとか、の主張は、われわれの分析目的にとってはもの足りない。何よりも、同一の対象がどのようにして、また何によって相互に対立した「カテゴリー」において取られるのが不明確であるからだ。私が本テキストで書いている記述の方が、満足がいかにぬまでも事実に近いと思われる。本テキストで扱うものは、名辞による「対象」理解の全く独特のタイプのもので、なかなかうまく記述しにくい。

(原 31) 私は論文「個の対象の形相構造について」(『哲学研究』誌 vol.1, Leopoli 1935)と、その後もっと詳しく『世界の存在をめぐる論争』(第2巻, 1948, 第8, 27, 29節)で、すべての過程が二重構造をもつことも示すべく努めた。つまり一方でもろもろの位相の絶えず増大する全体が展開され、他方で過程の展開中に属性の独自の主体〔担い手〕が構成される。ある過程(活動)の名辞は、過程をその属性の主体たる面から捉えるわけである。

(原 32) ここで言葉の表現と悪戦苦闘することになる。当面、うまい表現が見当たらない。定動詞の語義とその志向的相関者を分析する時、私のいわんとすることを読者は汲み取っていただきたい。それをどうしても名辞化するしかない。名辞的志向性を借りてしかできない。名辞的志向性は過程をその属性の主体たる面から捉えることになる。しかるに動詞の質料の内容ときたら、過程をその絶えざる生成として樹立していて、最終的に構成されることになる対照的構造には気を配らないのである。したがって、動詞を端的に用いる場合は「対象化」は不用である。このことを分かってもらうためには動詞を用いてその独自の意味を意識しなければならない。ある定動詞を考える時、その意味志向をそのままずばり果たさせ、よって思惟する意味に向かい合わずに、またその意味からある特殊な客体をつくらずに、その意味志向を直観的に把握しなければならない。こんなことをくどくど書くのは、動詞のまさに考えられる意味を読者に容易に直観的にみぬいてもらわんがための技術的な方便にすぎない。この先の私の分析で分かるように、定動詞は過程というものをもろもろの位相が進展しながら絶えず生成してゆく全体として樹立するのである。
[1958]

(原 33) この問題の解決に近づいた人は、ドイツの学者 S. H. Herling ヘーリングであると思われる。彼は『ドイツ語の文章論』(1830, 第1巻8頁)でこう書いている。「文ではこの関係は生起中のこととして現れ、語では生起済みのこととして現れる。「鳥が飛ぶ」ではこの関係は実際に生起している。「飛んでいる鳥」では、飛行と鳥との関係は生起済みのこととして示される。[ドイツ語原文省略]ただここで問題としているのは、文と名辞の相違ではなく、定動詞と名辞の相違である。„die Beziehung“ (関係) が完了的性格であるか否かを示すことで、この相違を説明するのは正しくないように思える。[1958]

(原 34) ブフェンダーがいわゆる「Tunberiffe」(彼が意味する行為概念)について次の字句で述べる時、時間的生成における「展開」という特殊な志向性をおそらく念頭においていただろう。「しかし、行為概念が Beilegebegriffe 付与概念から本質的に異なるのは、行為概念が非独立的なものとして捉える対象を、時間的に延長する行為の形式で思惟的に包むことによる。その際、行為概念は、今度は対象そのものが行為であるとは少しも主張しない。対象に行為を実質的に関係づけない。[ド



(写真 28/武)〔註〕

コンチューシコ塔。

(左)晩秋の落葉 (1977 年撮影) と、

(下)塔への冠雪した螺旋状小路 (1978 年撮影)。



イツ語原文省略)』(『論理学』前掲書 311 頁)。引用した文は注釈なしでは大変理解しにくい。文字通りに取れば、正しくない立場が目立つ。とはいえ、私がここで扱っている問題に近い。この主張は次の理由で正しくない。(1) この「行為概念」(定動詞)はいかなる対象も、属性の主体も樹立しないとしている。動詞的に展開する「活動」(行為)の面が隠れたままであるか、動詞の志向的相関者となるものにこだわるなら、この面がその語義によって樹立されなくなる。(2) プフェンダーのいう「概念」も私のいう語の意味もそれとして「主張」(behaupten)できなくなる。それでも次のように明言する時、プフェンダーは正しい。定動詞が何度用いられてもその志向的相関者は活動(過程、行為)という形相構造をもつ必要はないし(プフェンダーの例だと *der Himmel blaut* [空が青く見える, *blaut* が定動詞] また相関者の形相構造は定動詞に出てくる展開という特殊な志向性に少しも依存しないし、最後に、それはこの志向性によって規定されない、と。私が活動性の「展開」と呼ぶ志向性の特殊形態の問題と関連して、さらに H. Lotze ロッツェの『論理学』から注目すべき主張を引用しておこう。「今、例としてあげた動詞の意味を十分に考えるためには、いくつかの個々の内容をわれわれの表象の特殊な運動によって相互に結びつけなくてはならない。この運動はもちろん、時間のなかでのみ

進行されるが、それが意味し言わんとする点においては、いかなる時間的過程にも依存しない。一言でいえば、動詞の形式の一般的意味は生起ではなく、いくつかの関係点間の一関係である。そしてこの関係は思考しうる世界において常に非時間的ではない内容相互間にもよく起こるし、また現実にも属し時間的に変化できる事物間にも起こる。」(前掲書 18 頁以下) ここで「われわれの表象の運動」についても、「いくつかの関係点間の関係」についても、たしかなことはいえないが、それでも私が動詞のなかに出てくる志向性の特殊形態のおける「活動の展開」について述べる時に、私が考えていたことのいわ前触れがロツツェに見られる気がする。しかし、ヘーリングの方がロツツェよりも私が問題としていたことに近いように思える。

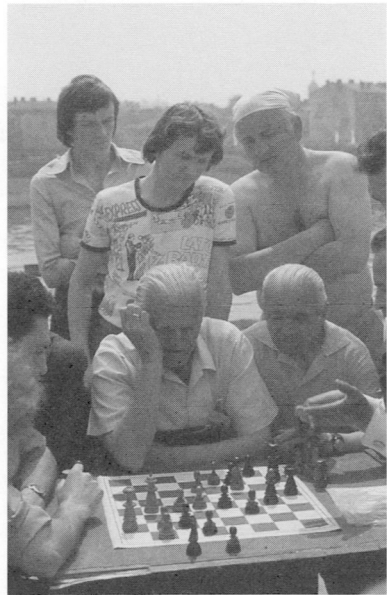
(原 35) たしかに、ラテン語のテキストに *hosten vicit* [敵を打ち負かした] のタイプの文が多々見かけられるが、明らかに省略文であってその意味は前後の文によって補われる。第二にいきなり文として現れる場合で、読者もただちに *vicit, amo* 等の語が文においてしか果さない機能に注目する。私は動詞がこうした機能を果すことを否定するつもりは少しもない。ただ主張したいことは、文の中に登場する動詞は、孤立の動詞として登場する時の意味とは、別の意味をもつということである。私は目下の考察ではこの孤立した動詞に焦点を絞る。

〈写真 29/武〉

ヴィスワ河河畔で日光浴しながらチェスを楽しむ (1977 年撮影)。

(原 36) 対象の形相構造において活動の(能動的ないし受動的)主体は、属性の主体〔担い手〕から峻別されるべきである。属性の主体ではあっても活動の主体とはなりえない。しかし逆ではない。

(原 37) A. プフェンダーは定動詞の語義のなかに動詞的方向指示因を識別していないが、【次のように主張する時】、私が提示している事柄に注目していたかもしれない。【「行為概念で樹立される対象は、ひときわ非独立的に捉えられる。そして行為概念の能動形だと、活動の思考的主体に関係づけられ、受動形だと活動客体に、つまり、全思考的支えを与えてくれる対象に関係づけ



られる。〔ドイツ語原文省略〕】(『論理学』312頁)

(原 38) 〈 〉内の訳にドイツ語第一版を採用した理由は、ポーランド語訳が『文学作品論』の第二版に基づくゆえ、非常にまわりくどい表現になっているためである。

(原 39) この考察は語義の構造と機能の相違だけに関係し、この相違が各国語において、発生的意味で事実上つくられた語彙相互間の相違と一致するかどうかは不問に付す。

〔写真 2〕「クラクフ民芸品祭」は、クラクフ中央広場(200 m × 200 m)で開かれる。これはヨーロッパで一番広いだけでなく、ここでさまざまな年中行事が開催される。

民芸品祭の他に模型コンテスト(写真 9)や荒々しいLajkonikの市中パレード祭も行われる。後者は13世紀のタタールの侵攻を撃破した祝賀祭であって、馬上の英雄はタタール人に扮して荒々しく市中パレードする(7月初旬)。その模型は、あまりに大きすぎて、残念なことに持ちかえれなかった。

広場では、クリスマスには普段は入れない教会の扉が開かれる。旧市街区の教会はなんと四十数箇所に及ぶ。特に復活祭はカラフルなイベントとして繰り広げられるようだ。ポーランドの人口の95%がカトリック信徒である。筆者は3月初旬に帰国したので参観できなかった。

〔写真 14〕インガルデンはハルトマンの全著作に目を通し、自分の見解との相違を本にメモしていた。

〔写真 16-21〕インガルデンの著作の中で、ドイツ語を除く外国語に翻訳された最初のもので、意外にも『美学研究 I・II 卷』のロシア語版 Исследования по эстетике. Москва (1962) である(写真 16)。

次が『世界の存在をめぐる論争』の英抄訳、*Time and Modes of Being* (1964)

三番目が『絵画の構造』のスロバキア語版 *O štruktúre obrazu* (1965) (写真 17)

四番目が『文学作品読書論』のチェコ語版 *O poznávání literárního díla* (1967) (写真 18)

五番目が『文芸作品論』のイタリア語版 *Fenomenologia dell'operaletteraria* (1968)

六番目がオスロ講演のノルウェー語版 *Innføring I Edmund Husserls Fenomenologi* (1970) (写真 19)

七番目が『文学作品読書論』のユーゴスロバキア語版 (1971) (写真 20)

八番目が『文芸作品論』第二版の英語版 (1973) (写真 21)。

この外国語翻訳の経過を見るとインガルデンの哲学は、まず東欧諸国に知られ、しかる後にようやく1973年に英語版であまねく知られるようになった。初版から四十数年経過していた。

〔写真 22〕 『世界の存在をめぐる論争』第3巻 (1982)。インガルデンは第1巻、2巻をポーランド語で執筆し (1948-49)、8つの存在契機 (存在自律, 存在他律, 存在独立, 存在非独立, 存在依存, 存在非依存, 存在派生, 存在非派生) の数学的組合せの64通りから、4つの可能な存在様式—— 1) 絶対的存在, 2) 理念的存在, 3) 実在的存在, 4) 純粋志向的存在を提示した。インガルデンは1)については、「神?」として、疑問符を投げかけて、あまり語らず、2)を、リアルタイムを超えた、発見されるアイデアの世界として積極的に認めている。4)は、芸術一般の世界で、人間の意識の志向性が意識の地平上に樹立する世界であり、インガルデンは、この『文芸作品論』やこの姉妹編の『文学作品読書論』で「純粋志向的存在様式」を確証し得たと確信している。

第3巻はドイツ語で執筆 (1950-51) した (*Über die kausale Struktur der realen Welt. Der Streit um die Existenz der Welt III*)。ゲェルランカ女史がポーランド語訳した。副題として「実在的世界の因果構造について」と題されていることからして、3)のリアルタイムの存在様式にあてられている。

〔写真 23〕 『倫理学講義と論義』(1992) は、クラクフ大学哲学研究所における1960年代の講義録である。ストゥルゼフスキ教授の序文付き。

〔写真 24〕 『認識論研究』(1995) は、ルブフ大学時代講義録 (33回) であり、そのテーマは「外的知覚の客観性の問題」。そのほかに「外的知覚の現象学」の論考も収録されている。

〔写真 25〕 私事に及んで恐縮であるが、3月の初旬に帰国したので、復活祭の様子を見ずに終わったが、復活祭には、白い卵の殻に彩色をほどこす風習がある。この切り紙細工師による雌鶏の図柄の、円形の切り紙細工 (この写真の手前に映っているもの) をもとめた。それは、復活祭のためでなく、自分が干支の酉のゆえである。今でもこの切り紙細工は後生大事に別府のマンションの玄関口に飾ってある。それは、不思議と色褪せていない。神社の晨鶏は洋の東西を問わず、神鶏なのである

〔写真 26, 27〕 さて、ここでリシカ君 (写真 27) を紹介しておこう。

突然12月12日にたどたどしい日本語で私の部屋を訪れた日本刀の研究者 (クラクフ東洋美術館で学ぶ大学院生) であり、筆者は彼との2カ月半の短い付き合いのなかで、彼を介していろいろなことを学ぶ機会が多々あった。

彼によればクラクフ支部に日本の空手愛好部員が1500人いて、彼がその会長であった。この地位を利用して日本への航空券を手にして日本に2カ月滞在した。我が家 (岐阜県不破郡垂井町) に1カ月滞在して、熱田神宮 (写真 30) や南宮神社の名刀を拝観した。我が家を基点に数回京都見物に出かけた。

彼とのクラクフでの3カ月足らずの付き合いがなければ、ヤシンスキによる浮世絵の存在も知らず、『Zycie Warszawy』紙記者との対談記事 (Prof. Yushiro Takei o

wrazieniach z Polski. 1978年5月4日号)も載らず、ピンク・マドンナ(参照『マリア教会とピンク・マドンナ』(前掲『未来』誌, 1979年7月号)も観ずに帰国したのであろう。

ましてや、市庁舎の地下劇場 PIWNICA で POD BARANAMAI (羊のひざもとで) 演劇と歌謡を観劇することはなかったであろう(地下劇場については写真31の説明を参照)。

リシカ君の消息はわからない。帰国してから、徴兵を拒否するために亡命の道を選んだ。まず単独で亡命。後から妻も亡命したとの国際電話を最後に……。彼はワシントン美術館に憧れていたが。思うに、彼は、日本語で読み書きが出来る日本通であっただけに、日本文化をポーランドにもっと紹介して欲しかった人物であったが、行方知れずで、至極残念だ。

リシカ君は学生寮(写真26)をいみじくも「軍艦」と言ったが、それは煙突から石炭の黒煙を吐き出していることによろう。冬の暖房のエネルギー源が石炭なので、その黒煙の煤が街路に積もり、降った新雪は二、三日で「黒い雪」のシャーベットと化してしまう。加えて、クラクフ近郊の新興工業都市ノヴァ・フタ(NOWA HUTA, 新製鉄所の意味)の吐き出す黒煙がこの情景を加速させている。新雪に混じっている煤を指して、Martaさんが言うには、「これノヴァ・フタから吹いてきたものよ。」

スターリン時代にこの新都市の大型プロジェクトを立案したのが、今は亡きギェルランカ女史によれば、インガルデン夫妻(Janusz, Marta)である。筆者は留学中(1977年度)2度、ノヴァ・フタの街並みを散策し、緑の少ない無機質な殺風景な索漠とした工業都市に、正直言って、辟易した。夫妻はもともと控えめな人柄であるので、この都市計画について、ついぞ、口にすることがない。

[写真28] 南部に小高い丘が東西に走っていて、その東端に螺旋階段のついた Kopicz T. Kosciuszki コシチュエシコ塔がピアスト通りから望める。わが宿のヤギェウオ大学学生寮「ピアスト」から往復2時間あまりの道のりで、富農が経営する裾野のバラ園の匂いと色彩が歩く人の歩を止める楽しい散歩道であった。

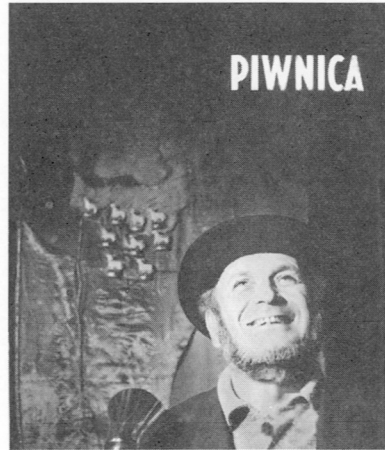
(写真30/複)

熱田神宮にて(中日新聞提供)。



〔写真 31〕 訳者武井は地下劇場 PIWNICA で前衛的な独り芝居を参観した。午後 8 時に始まり、翌朝 3 時まで続いた。真っ暗闇のなかで、演技者が懐中電灯で自分の顔を照らす様は異様な体験で今でもまざざと蘇る。

ヤーヌシさんは、「クラクフの市民でもこの劇場の切符を手にするには困難です」と、本棚にあった本『PIWNICA』にインガルデン家の皆さん (Janusz, Marta 夫妻, Joanna 嬢) が、「贈 Yushiro Takei 様へ、クラクフに滞在した記念に。Marta, Joanna, Janusz Ingarudenowie 24 II 1978」と各自順にサインして惜しげもなく筆者に手渡してくれた。この本には、演技者の写真だけでなく、歌われた歌詞や譜面が多数収録されている。



〔写真 31/複〕〔註〕

『PIWNICA』のカバーより。